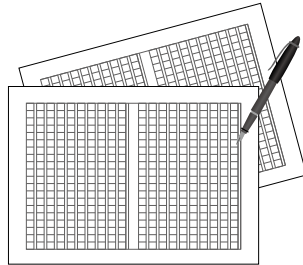


第8回 ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



第8回ふるさと秋田文学賞 受賞作品集



刊行にあたって

本県は、全国の都道府県に先駆けて、平成二十二年に「秋田県民の読書活動の推進に関する条例」を制定し、平成二十六年には十一月一日を「県民読書の日」と定めました。

「ふるさと秋田文学賞」は、その記念事業として創設され、県内外の方々に秋田への愛着を深めていただくとともに、広く読書に親しむ気運を高めることをねらいとして、秋田の自然や文化、風土、人物などを題材として描いた作品を対象に、選考されている賞であります。

第八回を迎えた今年度は、全国より一二七編の御応募をいただき、心から感謝申し上げます。

今年度も、コロナ禍の影響により、普段とは異なる日々の中にあつて、これまで以上に家族や友人、ふるさとを想う強い気持ちや深い洞察を感じる作品が多く見受けられました。

また、今年度から部門の一つを見直し、「エッセイ・紀行文の部」として枚数を減らしたことにより、短さの中にも難しさがあつたのかもしれない。

読書は、読む人の心を動かし、夢や希望を得るきっかけとなることに加え、人生における様々な選択の場面において、その判断を大きく後押ししてくれることでしょう。不安の大きな時代だからこそ、心のよりどころとなる本との出会いが、私たち一人ひとりの可能性の扉を開き、一歩前に踏み出す勇気を与えてくれるものと信じております。

今後も、県民の皆様が、生涯にわたり読書に親しみ、心豊かに人生を送ることができまますよう、読書活動の推進に全力で取り組んでまいりますので、よろしくお願いいたします。

令和四年二月一日

秋田県企画振興部長 鶴田嘉裕

目次

第8回ふるさと秋田文学賞 小説の部

◇ふるさと秋田文学賞

山椒と虹

受賞者のことば

渡部 麻実・・・7

◇ふるさと秋田文学賞佳作

停戦旅行

受賞者のことば

畠山 政文・・・37

第8回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

◇ふるさと秋田文学賞

大地と共に我ら生き

石原敏子・・・75

受賞者のことば

◇ふるさと秋田文学賞佳作

廃屋の月ゝ矢口高雄さんを偲んでゝ

工藤幸・・・89

受賞者のことば

◆ 選評

「説明」せずにどう書くか

内館 牧子 104

どこに視点を置くか、冗漫を削る

塩野 米松 108

ふるさと秋田文学賞選評

西木 正明 112

◆ 一次選考委員寄稿

フィクション

柴山 芳隆 116

◆ 秋田県の読書活動推進施策

. 121

◆ 作品募集要項・実施状況

. 125

第8回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞

山椒と虹

渡部
麻実・作

山
椒
と
虹

テレビの速報ニュースを告げる音ではっと目が覚めた。洗濯物をたたみながら、ソファにもたれかかってうたた寝してしまつたらしい。横を見ると亜美はさつきと変わらず、おままごとセットの桃を半分にしたり、またひとつにしたりしている。マジックテープで真ん中がくつづくようになっていなのだ。亜美もふと目を上げて「んっ、んっ」とテレビを指さす。もうすぐ二歳になる娘にも、その速報音は聞きなれつつも異質なものに思えるのだろう。

「東京都、新型コロナウイルス感染者、過去最大〇〇〇〇〇〇人を突破」

毎日毎日更新しているその数になんの意味があるというのだろう。おおかみが来ると嘘を言い続けて、そのうち誰にも信じられなくなった少年のお伽話を思う。その数の大きさに、私ももちろん、私の周りの誰もが驚かなくなっていた。

それよりも、と北側の扉に目を向ける。五時になったということは、定時の会議を終えた雄二がそろそろリモートワークを終えてあの部屋から出て来る。洗濯物は散乱しているし、亜美のおもちやもそこら中に点在している。夕飯の準備はもちろんできていない。また大きなため息について冷蔵庫を開けるだろう。大丈夫、今日はまだ缶ビールが何本かは冷えていたはずだ。それで時間をつないでくれればなんとかなる。

ベビースイミングで佐々木さんにつかまっただのがいけなかった。彼女の話は長くて、その間

公園で遊ばせていた亜美も、亜美より一つ上の彼女の息子、樹くんも顔を真っ赤にして走り回っていた。私が「熱中症にならないかしら」と言うと、彼女は

「本当に久美さんって心配性よね。そんな簡単に子供なんて死なないわよ。危なくなったらわかるもんよ。あの子のお兄ちゃんだって、あれぐらいの歳の時はあんな風に茹でだこみたいな顔して走り回ってたし」

男の子二人を育てている佐々木さんはいつも上から物を言ってくる。それが嫌で距離を置く人が多いのに、私はいつもつかまってしまふ。雄二に言わせると「要領が悪い」のだ。話しかけられて、聞こえないふりをして無視するほどの度胸がない私は、確かに要領が悪いのかもしれない。なかった。

散々彼女の話聞いて帰ると、もう夕方近かった。とりあえず亜美にこれでもかと麦茶を飲ませ、洗濯物を取り込んでたんでいるうちに、時間はあつという間に過ぎていった。早く、早く。洗濯物をすべてタンスにしまい、落ちているおもちゃを箱に入れて、足元に絡みつく亜美に気を付けながら食事の支度をしなければ。大人と子供の食べるものは違うから、数種類の献立を二つ考えなければいけない。でもどうしても体が動かなかった。

北側の部屋は元々子供部屋にするつもりでいたので、壁紙はピンクを基調とした気球柄だ

し、カーテンの裾にはレースのフリルがついている。その部屋をリモートワーク用に使うから、と告げられたのは半年ほど前だった。その日のうちに雄二は亜美の赤い洋タンスも、オーダーメイドで職人に作ってもらったおもちゃ棚も廊下に出してしまい、翌日には彼がネットで頼んだ大きなデスクとゲーミングチェアが届いてその部屋に設置された。あの壁紙を横目に仕事をしている雄二を思うと、なんだか薄らおかしかった。だが彼はその日から変わってしまった。前のように亜美と遊んだり、すすんで風呂に入れたりすることはなくなり、食事もほとんど無言で食べるようになった。昼食も最初のころは部屋から出てきて一緒に食べていたのだが、そのうち仕事部屋の前に置くように言われた。そして、いつの間にか夕食を食べて風呂に一人ではいると、部屋に戻ってしまうようになった。仕事が残っているから、と言っていたがしばらくして聞こえてくるのは大きなびきりだけだった。

そんな日が続いて、あるとき、箱で買っていたビールを冷蔵庫にしまい忘れていた日があった。いつものニュース速報が感染者数を告げ、それからほどなく部屋から出てきて「あれ、ビール冷えてないじゃん」という雄二に、私はキッチンに立って背中をむけたまま

「氷ならたくさんあるから、氷入れて飲んでみたら？ 昔、高円寺でベトナム料理食べたとき

に、氷入ったビールあったよね」

と言った。一瞬の間があつて背中に人の気配を感じて振り返ると、夫は私のすぐ後ろに立っていて、それを認識するかしないかのうちに私は頬をふたれていた。テレビを見ていた亜美が大きな音にびっくりして振りかえり、その場で泣き出す。私は頬をおさえたまま亜美のところへ行つた。

「ごめんね、大きい音、怖かつたね。大丈夫、大丈夫だから」

まるで自分に言い聞かせるかのように、何度も口の中で繰り返す。雄二はそのまま玄関から出て行つてしまった。それが二週間前のことだ。たまたま虫の居所が悪かつただけかもしれない。でも付き合ひ始めて四年で結婚して、子供ができるまでは五年かかり、亜美がもうすぐ二歳になるというほぼ十年間の付き合ひの中で、手を上げられたことはこれまで一度もなかつた。それどころか言い争ひすらなかつたのだ。軽い嫌味や冗談の交じつた愚痴はあつた。でもどれも笑つて流せるくらいのものでつた。でも今のは違う。体中の細胞がそう声を揃えていた。

しばらくしてコンビニの袋を下げて帰つて来た雄二がどんな顔をしていたのか、思い出そうとしても思い出せない。記憶の中の彼はのっぺらぼうだ。リビングの机でビールを飲み、自分

の分だけ買ってきた弁当を平らげて、彼は部屋に戻っていった。私はテレビに夢中な亜美を抱いて、ちらちらを彼の様子をうかがっていたけれど、その姿はまるで知らない人に見えた。我が家の子供部屋に住み着いた知らない人。そしてテレビの速報音はその知らない人が出て来るぞ、気をつけろという警報になった。日本中の、私の中だけで。

今日もまだ夕食ができていないことに、部屋が片付いていないことに、腹を立てて私を殴るだろうか。いや、ビールが冷えているから大丈夫かもしれない。その間にささっとつまみを作って、亜美には簡単におにぎりや冷やした味噌汁を飲ませ、肉を焼いて、サラダを作って……。なぜか手順を考えているだけで泣きそうになる。こんなことで泣きそうになるなんて馬鹿馬鹿しいと自分でも思う。でも。リモートワークになってオンとオフの切り替えがうまくいかなかった雄二と同じで、私もいつもいないはずの人が家にいることにいまだに慣れないのだ。必要のなかった大人一人分の昼食を毎日作ることが、飲み会だと聞いてたまには休むことができず夕飯の準備が、まさかこんなに負担に、苦痛になるとは思わなかった。雄二もきつそうなのだろう。残業だと言って会社の喫煙室で無駄話をしていた時間や、付き合いだからとしぶしぶ行っていた飲み会が、きつと彼にとっては大切な息抜きの時間だったのだ。それを一日中ピ

ンクの気球の壁紙の部屋で無言でパソコンに向かい、ドアを通しても時折聞こえてくる亜美の泣き声に苛立ちながら仕事をすることは苦行に違いない。

ふと佐々木さんが公園で言っていた「パートでもすれば」の言葉が頭の底から持ち上がってくる。この長く続くコロナ禍のせいで、仕事を失くした人もいれば、保育園や幼稚園に子供を預けておくのが怖いという理由で主婦が辞めてしまったり困っている会社もあるらしい。正社員を雇う余裕はないが、使い捨てできるパート主婦なら欲しいというところはいくつもあるといっていた。今まで雄二が外に仕事に行っていて保たれていたバランスが崩れたなら、今度は私が外に出ていけばいいのではないだろうか。あれから何回か殴られた。きっかけは些細なこと、亜美が見ているときもあれば、寝てしまった後のこともあった。最初こそ何か言おうと思っていたが、そのうち一度殴られて済むならその方が楽だと思うようになってしまった。私は抵抗することもなくただ棒人形のように殴られた。ふと故郷の秋田の田んぼに立っていた案山子を思い出す。私はいま、あの案山子だ。風にボロボロの布切れをたなびかせ、カラス除けのはずなのに、真横に伸ばしたその腕にはカラスが悠々と止まっている。雨の日もカンカン照りの日も、大した意味もなくそこにあるあの案山子の群れに、私ひとりが混じっていても誰も気がつかないような気がした。

雄二と出会ったのは大学のキャンパスでだった。卒論の直しがあり、ゼミの狭い部屋でパソコンのキーボードを叩いている時に、あの東北の大震災があった。「わあわあ」とあちこちから大きな叫び声が出て、学生たちが飛び出して来て、私も胸にパソコンを抱えたまま廊下で座り込んでしまった。その時まで彼が同じ学年だと気づかなかったのは、学部が違ったのと、面白いくらいに選択授業が被っていないからだと気づくのは、もう少し後のことで、その時はただ同じ大きな地震に驚く隣の研究室の学生同士だった。

「大きかったよな、揺れ」

彼は広い肩幅を揺らしてそう言った。私は声もなくうなづく。すぐに携帯を取り出した雄二は

「東北の方らしい。震度6って書いてる」

とニュースサイトを読み上げ始めた。私はすぐさま自分の携帯を取り出して母に電話する。何度リダイヤルを押ししても、通話は話し中のままだった。そこで、ショートメールで父と母にそれぞれ安否を確認する短いメールを送った。自分のことは書かなかった。少し前に就職のことで言い争ったことを少し後悔したが、同時に怒りも収まっていなかったからだ。いま思うと我ながら幼いと思う。あの時、両親が生か死かの瀬戸際にあっただかもしれないのに、自分のく

だらな感情を優先したことを。だが、それほどに雄二の声に緊迫感がなかったのだ。震度6でも大したことのないように話すから、あとで自分で研究室の片づけをして、倒れたテレビを直し配線を繋いでからやっと事の重大さに気づいた。大きな津波で何人も亡くなっている可能性がある。だが救いは秋田にはその津波は影響していないらしいということだけだった。

「お、テレビついたんだ」

隣の研究室から雄二が覗き込み、周りの他の研究室からも学生たちが集まってくる。

「どうやら電車止まってるらしいよ。今晚、俺らここに泊まりかもな」

雄二はさも当たり前のように言った。大学生が研究室に泊まるのはめずらしいことではない。学校も教授も積極的に勧めてはいなかったけれど、黙認していた。

「俺のとき、カップラーメン結構あるわ。他に食料あるやついる？」

集まった何人かのうち、総じて男性陣は少し浮かれていて、女性陣は眉間にしわを寄せてテレビにくぎ付けになっていた。そのうち、なぜか私の研究室が一番片付いているという理由で、近くの教室にいたほとんどの生徒が集まり、二十人近い人数で酸素が薄くなりながらも、私たちは肩を寄せ合って食事をし、話をした。

私は時折彼らの輪から外れて母に電話をかけた。相変わらず、通話はつながらなかった。

「もしかして、実家、東北？」

雄二はそう聞いた。私は小さくうなづく。

「福島？ 宮城？」

私は首を振った。雄二はそれ以上は詮索してこなかった。その代わり私の肩に手を置き

「大丈夫さ。そう思っとけば、大抵のことは何とかなる」

と言った。その言葉にどれだけ救われただろう。

研究室はテレビのお通夜のような映像を肴に、あちこちから持ち寄られた酒やお菓子で溢れかえり、まるで通夜振舞いのようだった。皆、この非常事態を楽しんでいるようにも見えた。私たちは一晩中眠らずに、話したり、テレビを見たりして過ごした。大学生活の四年間の中で、あの日が一番濃厚な一日だったと、私は心から言える。大きな災害の中、不謹慎かもしれないけれど、私が生まれて初めて恋に落ちた日だとも。

明け方、少し眠りに落ちた私の携帯が小さく震え、そこには母からの

「うちは大丈夫。停電してるけど、お父さんもお母さんも無事だから」

という短いメッセージが届いていた。ニュースでも秋田県内の被害は少ないからか、あまり

詳しい情報はなかった。それよりも繰り返し津波の映像が流され、それに呼応するように起こる余震で何度か揺れた。母から連絡がきたことで少しほっとした私は、歩いて帰ることにした。幸い大学から私のアパートまでは三時間もあれば歩ける距離だ。研究室でまだダラダラと時間をつぶそうとしている人たちが尻目に、私は帰る準備を始めた。それを見た雄二は

「帰るの？」

と聞いてきた。私は反射的に「来る？」と答えた。雄二は少しかの端をあげて「うん」と言った。笑ったようにも、困ったようにも見えるその顔は、ちよつと前にペットシヨップで見かけた犬に少しだけ似ていた。そうして私たちは一緒に三時間の距離を歩いてアパートに帰り、狭いシングルベッドで手をつなぎ、泥のように眠った。誰かがそばにいる安心感は、その日、私にとって何よりも必要なものだった。夕方になり、私たちは町に出たが、ガソリンスタンドには長蛇の列ができていて、コンビニにはおにぎりひとつ売っていなかった。何軒か回ると、少しはすぐ食べられるものが手に入ったけれど、停電してレジが使えない店や、ワインの瓶が落ちて割れたまま掃除できないところもあった。私たちが立っているここも影響を受けるほどの大地震だったのだ。そう認識すると、足が震えてしまいそうで、私はできるだけ別のことを考えようとした。その時に雄二の手のぬくもりはありがたかった。一人じゃない。

それだけで十分だ。

それから私たちは震災の影響で卒業式もないまま大学を卒業し、就職した。4月になっても元の生活に戻ったとは言い切れなかったけれど、新しい生活は否応なしに始まる。幸い実家は壊れたところもなく、知り合いで亡くなった人もなく、両親も普通の生活に戻りつつあるようだった。

大学を卒業したら秋田に帰って就職すると嘘をついて東京に出て、結局東京の会社に就職を決めたことも、そのことで3月になってもギクシヤクしていたことも、あの地震がすべて持つて行ってしまった。大学に入ってから四年間で帰省したのはたった二回。一回は同窓会のためで、一回は認知症になった祖母を見舞うためだった。その時にはもう祖母は私のことを認識できる状況になく、それきり会いに行くのを辞めた。会っても仕方ないと思ったからだ。あっちだって知らない人に手を握られて「頑張つてね」などと言われ、涙を流されても、迷惑だろうと思ったのだ。そんな私を母は「冷たい人間」と呼んだ。祖母はそれから間もなく亡くなった。葬式にも授業を理由に行かなかった。何か月、何年かかって消した『田舎の匂い』のようなものが、たった一日帰省するだけで呪いのように全身にまとわりつき、シミのように残ってしまう気がした。生まれた土地として嫌っているわけではなかったけれど、望郷の念とか、田

舎愛のようなものを私は持ち合わせていなかった。それは何か理由があつてとか、自分で選んだわけではない。そう生まれついただけなのだ。もし生まれる場所を選べるシステムがあつたとしたら、私は秋田を選ばなかつただろう。そして今の両親も。そこに深い理由も、意味もなく。

大学を卒業して就職し、四年ほどして仕事にも慣れと飽きが出てきた頃、雄二からプロポーズされた。花束も指輪もないプロポーズが、なぜか彼らしいと思つてしまった。両親に挨拶するために秋田へ出向くと言つた彼を止めたのは私だ。電話で事後報告なんて、と両親は面白くなさそうだったが、二人とも仕事が忙しいからと言うとしぶしぶ納得したようだった。それから結婚式もなく、淡々とした二人の生活が始まつた。しばらくは私が学生時代から住んでいたアパートで一緒に暮らし、貯金に余裕ができると駅近の2LDKに引っ越した。古い建物だったがけれど、窓から大きな樺の木が見えるのが気に入つた。近くには小さな川が流れていて、夏場にそこを歩くと大量に蚊に刺された。それでも仕事が終わつて家で夕食をとつたあと、その川のほとりを二人で散歩するのは私たちの大切な日課になつた。

二人とも、昔の話はほとんどしなかつた。過去はせいぜい大学で地震にあつたあの日の話まで、他はいま抱えている仕事や、会社の同僚や、次の休みに行きたいワインバーの話、いつ

か行きたい遠い外国の話だけだった。雄二の出身は九州で、両親は健在で、兄弟は兄が一人、妹が一人。二人とも実家で暮らしているということしか知らない。要するに私たちは義理の親や兄妹となった人たちひとりにも会わず、二人だけですべてを決めて、二人だけで生活していた。二人とも、あの地震の日に何かを決めたのかもしれない。今まで普通だったものが、そうではなくなること。今まで生きていた人が、一瞬の波で亡くなってしまふこと。当たり前に入るものが、街中から消えてしまうこと。それを経験して、今までと同じではいられない。本当ならそこで「じゃあもつと大切にしていこう」と思わなければいけないのかもしれないけれど、私たちは逆に自分から離していくことを選んだ。最初から執着していなければ、失っても傷つくことはない。雄二と私はそんなところが似ていた。

結婚してしばらくしても妊娠の兆候はなかった。不妊なんじゃないのと会社の同僚に言われ、初めて婦人科に行ったけれどなんの問題もなかった。次は旦那さんも一緒にと言われたことは雄二には伝えなかった。いずれ時期が来れば妊娠すると思つたし、もししなくてもそれでもいいと思つたからだ。雄二もことさら子供が好きだとか欲しいだとかいう話はしてこなかった。私たちのバランスは二人でちょうどよく、まるでやじろべえのようにユラユラと揺れていた。

た。その揺れは心地よかった。だが結婚五年目の夏、相変わらずお互いの親の顔も知らないまま、私は雄二の子を妊娠した。十年勤務すると必ず転勤の話が出るという噂のあった会社は臨月まで勤めて辞めることにした。産休と育休を取って戻ると十年になる。そこで転勤など言われても私にはきつと対応できない。我ながらちょうどいいタイミングだと思った。しばらくは雄二の給料だけでも暮らしていけるし、結婚式もせず、衣食住にもあまり金をかけない私たちは、数年なら私が働かなくてもやっていける貯金はできていた。

雄二は妊娠をことさら喜んだ訳でもなかったけれど、メガネの奥の目を細めて

「いろいろ準備しなきゃな」

と言った。そして私たちは自分たちの物置にしていた北側の部屋をきれいに掃除して、子供用品を買い集めたのだ。今は賃貸でもあとから剥がせる壁紙がある。気球の柄を選んだのは雄二だった。ピンクと青と黄色の三種類からピンクを選んだのは私だった。その時まだお腹の子の性別はわかっていなかったけれど、なんとなくピンクの空に浮かぶ気球が気に入った。砂漠の空はこんな色なのかもしれないと思ったからだ。

それから性別がわかり、少しずつ女の子が喜びそうな、けれども私たちの暮らしを邪魔しないようなシンプルな家具を揃えてきた。それが2019年の私たちだった。

翌年、本来なら東京オリンピックに沸く中で生まれるはずだった亜美は、新型コロナウイルスの影響で誰もかれもが沈鬱な表情でマスクを常時しているさなかに生まれてきた。付き添いも面会も禁止された中で、私は初めての新生児をどう扱っていいかわからず、何度も看護師を呼んだ。その看護師もみな顔の半分を覆うマスクで、さつき私がなにかを聞いた人なのか、さつき検温に来てくれた人なのかわからない。日本にいるのに、日本にいないような気がした。私は外国の誰も知らない土地で一人で子供を産んで、一人で育てていくのだ。そんな妄想にとらわれるほど、マスクだらけの人々は異質に見えた。

退院の日、やはり大きなマスクをして病院の玄関先に立っていた雄二は、そっとマスクを外し

「やっと会えたな」

と亜美に話しかけた。そこで私はやっと深呼吸して酸素を体中に取り込めた気がした。雄二がいる場所、ここが私がいる場所で、新型のウィルスが蔓延しようとして、壊滅的な地震が起きようとして、私は一人ではないのだ。それはあの日、あの恋に落ちた日に感じた気持ちと寸分の変わりもなかった。

雄二の会社は相変わらず出勤前提で、リモートワークの環境整備に時間がかかっており、し

ばらくはそのままだろうと言っていた。それがいつまでもこのウイルスの終わりが見えなくなってきたことで、社内の若手が急ピッチでリモート環境を整え、労働組合が半分強制的に上層部を黙らせてリモートワークを強行した。今でもそれが正解だったのかどうかはわからない。結論から言えばその後もコロナの市中感染は広がっていったし、雄二の会社でも感染者は何人か出ていた。たまたま同日出勤ではなかったから逃れられただけで、私も雄二も、そして亜美もほそい紐でこよった綱の上を歩いているのに間違いはなかった。そんな中ベイスイミングを始めた私を、雄二は快く思っていないのは当然だった。でも子供を、しかも歩き始めた一歳児を一日中家に閉じ込めておくことは現実的ではない。だったら狭い公民館や、マスクなしで遊ぶ公園よりは、プールの方が安全だと思っただけだ。そこで今さらながらママ友ができて、その話が長すぎることは想定外だったけれど。

雄二が初めて私に手を上げてから、私たち二人の王国は崩れ去ってしまった。いやもしかしたらもつと前、亜美を妊娠出産した時から、なにかのバランスは崩れ、やじろべえは傾げて落ちてしまっていたのかもしれない。雄二はほとんど子供部屋から出てこなくなった。耳を澄ますと仕事のやり取りは聞こえてくるし、給料も振り込まれているようだから仕事は辞めていな

いようだった。でもそれ以外の時間を何をしてあの狭い部屋の気球を見ているのかわからなかった。亜美は最初こそ「パパは？　パパ」と開かないドアを指さして泣きまねをしたりしていたが、そのうち気にしなくなった。夕食だけは三人無言でテーブルについて食べる。それ以外はただの同居人のように、話すことも、出かけて来るねと声をかけることもなくなった。そしてたまに彼の機嫌なのか、私の要領の悪さのせいなのか、突然殴られた。数回我慢すればそれはおさまる。亜美に手を出さなければなんでもいい。私はひたすら黙って耐えた。

コロナ禍の中で生まれた亜美は、結局どちらの親にも直接会うことはかなわず、写真を送るかテレビ電話で顔を見せるのが精いっぱいだった。亜美は携帯電話の向こうに人がいるのが面白いらしく、私からスマホを奪うとニコニコしながら画面を見つめる。じいじとばあばは一生懸命声をかけるが、亜美がそれに答えることはなかった。もともと口数が少ない上に、私以外とは話していないのだから仕方ないと言えば仕方なかった。

「会いに行けなくてすいません」

私がそう言うと、雄二のお母さんは

「本当にね。赤ちゃんでも生まれたら、二人で来てくれると思って待ってたんよ。そしたらあなたにも会えるけん。うまい馬刺しば食べさせようと思って」

嫌味でなく本当に残念そうに義母は言った。

「それで雄二はどう？ 元気？」

「はい。通勤が減ったので家で仕事していることが多いですけど、元気です。連絡、ないですか？」

「全然よ。あん子は前からそうやけん。気にしとらん。元気ならよか。コロナ、増えちよるもんね。みんな気いつけて」

線の細い、繊細な風貌は少し雄二に似ている。でもそれにそぐわない元気な宮崎弁で義母は笑った。

「亜美ちゃん、またね。いつになったら会えるかねえ。そんな時はもう走っちよるだろうね」

雄二の母親と話す後ろで、義父が新聞からちらりと視線をこちらに向けた。いつも電話には出ない人だった。その視線は孫に向けて目を細めているようにも、義理を欠いている私をにらみつけているようにも見えた。

秋田の実家では父は犬の散歩に行ったあとだった。母は話し出すとキリがない。亜美のことは早々に切り上げ、あとはワクチン接種の予約がどうか、誰々さんは副反応で入院までし

たのには大丈夫だったとか、秋田で感染しているのはほとんど東京から来た人と会った人だとか、そんな話を延々と聞かされた。

「大丈夫。しばらく帰るつもりないし、亜美も私も雄二さんもほとんど外に出ないから安心させるようにそう言うよ」と

「子供は外に出さねば、ひ弱になるべ。公園さでも連れてけ」と忠告された。そして電話を切り際に

「いつ会えるかね。初孫だもんで、会ってないのおかしいべって」と言う。

「誰が？」

「近所の人」

でも、帰省したらしたので、東京からウイルスを持ってきたと噂するのも「近所の人」なのだ。その陰湿さと嗜好きな性質が、私が秋田を好きになれない理由の一つだった。一年のほとんどをあの曇天に覆われていたらそうなるのかもしれない。晴天続きのハワイの人たちが陽気なように、天候は人格形成に大きく影響する気がする。

「コロナ落ち着いたら帰るから。それまでお父さんと仲良く頑張って」

電話を早く切りたくて母が喜びそうない娘のふりをする。

「んだな。あんたも雄二さんと仲良くな。せば」

仲良く、と先に言ったのは私なのに、自分に返されると胸がズンと痛くなった。たまに殴られている、仲良くななかできない。でも、簡単に行き来できないいま、それをどちらの親にも相談できなかつた。無駄な心配をかけたくなかつた。

それから一週間後、実家から段ボールで食料が送られてきた。いつもそうめんのため使う甘い万能つゆ、オランダせんべい、横手市の木村屋のバームクーヘン、浅舞婦人会の漬物、亜美用にと桜でんぶとサラダ寒天も入っていた。そして私が生まれたときに植えたという山椒の木の枝一本。亜美が山椒に手を伸ばす。痛いよ、辛いよ、と手を止め、気を引くためにスプーンで一さじすくったサラダ寒天を口に入れる。亜美は一瞬モグモグと口を動かしてから、顔をしかめて「べえ」っと吐き出した。私は「そうだよねえ」と笑いながら、自分の口にも放り込む。まずい。好きな人も多いと聞いたけど、やっぱり私は苦手な味だった。これを夕飯に出したら、雄二はまた私に手を上げるだろうか。つまらない想像をして笑いたかったのに、なぜか涙がこぼれて止まらなくなる。亜美はそんな私を見て

「ママ、いたい？ いたい？ ごめんね」

とたどたどしく言った。

「違うよ。痛くないよ。ごめんね。大丈夫よ」

亜美を抱きしめると、汗をたくさんかいたせいか頭から鳥の巢の匂いがして、私はそれを思いきり吸い込んだ。

「くっさ」

私は笑った。それを見て亜美も笑った。秋田から離れて、東京に暮らした月日の方が長くなつた。それでも故郷はなくならないし、あの頃好きだった食べ物も、嫌いだった食べ物も変わらずある。私たちは二人で完結していると思っていたけれど、きっとそうじゃなかったのだ。私たちの育ってきた背景にいろいろな事が、今の私たちを作っている。一度も話したことのない義父のことが気になった。雄二に聞いてみたい気もしたが、それは今ではない気もした。

誰とも深く接触しないでよかった私たちの世界は、コロナ禍になって誰とも接触してはいけない世界になった。その二つは似ているようで相反している。でもまだ大丈夫。たぶん私たち

はやり直せる。いつか、あの小さな小川をマスクもなく三人で一緒に散歩して、今度は自分たちが生まれた時からの話をしよう。

もうすぐ今日もテレビの速報音が鳴るだろう。それにおびえるのはやめることにした。あの部屋にいるのはバケモノなんかじゃない。私の夫で、亜美の父親で、同じ人間だ。私は山椒の枝を透明なグラスに刺し、水をたつぷりと注いでキッチンカウンターに置いた。それだけでもいい匂いが部屋中に広がる。いつか秋田の実家に帰ることを考える。あの頃はこんな風に自由に帰れなくなるとは思っていなかったから、そのうち、そのうちと考えているうちに十年もたってしまった。隣の芝生が青く見えるように、帰れなくなって初めて「恋しい」という気持ちがわかった気がする。

雄二だって同じだろう。会社に出勤しなくなって初めて、外の空気が、世界が、自分を形作る大切な一部だと思っただけに違いない。そしてそのストレスで手を上げているだけだ、きつと。大切なことは話してみなければわからない。もしかしたら、雄二の父親も母親や雄二に手を上げていたのかもしれないという私の予想も。

仰々しく「未知のウイルス」と呼ばれたアレははまだ私たちの生活に影を落として、でもその代わりに見えなかったものも見せてくれた。見ようとする気持ちをくれた。十年前、東北を

襲った地震が私たちにいろいろなものを見せたように。

「ママ」

亜美が窓の外を指さす。

「ああ、あれはね、虹」

雨が降っていないのに、虹が出ている。雲のはるか上で雨が降っているのだ。見えているものが全てではないと言われている気がして、私は亜美を抱き上げながら、いつまでもその虹を見ている。

山椒と虹

小説の部 ふるさと秋田文学賞 受賞者のことば

明日が来るということ

渡部 麻実

ちょうど十年前、東日本大震災の日。あの瞬間、私は車で信号待ちをしていました。風もないのにやけに車が揺れるなど思っていると、やがて電信柱が大きく揺らぎ、信号の電気が消え、ブランブランと大きく弧を描いて踊る電線を見て、私はやっとそれが「地震だ」と気づいたのです。私は前の年に結婚し、二日前に新居に引っ越して夫と一緒に暮らし始めたばかりでした。車を路肩に止めて、何度も彼と、秋田に住む母に交互に電話をしましたが、どちらも繋がることはありませんでした。まずは家に帰らないと、と車を走らせましたが、信号の消えた交差点を走り、新しく住み始めた街へ帰るのは簡単ではありませんでした。今思い出しても、どうやって帰ったのか細かいことはなにも思



い出させません。荷ほどきもしていない段ボールだらけの部屋に帰ってテレビをつけて、東北で大きな地震があった、津波がくるかもしれない、都内の交通機関もすべてストップしていると、いう絶望的な情報にまみれた余震の中で、私は何度も何度も携帯電話のリダイヤルを押し続けました。

結果的に言えば、私の実家も夫も母も親戚も友達も、大きな被害にあった人はいませんでしたが。でもあの日から人生が大きく変わった人はたくさんいるでしょう。そしてそれから十年もしないうちにコロナ禍という大きな出来事に遭遇し、また人生を振り回されることになるのは誰も想像できなかったと思います。明日が来ることは普通ではないのだと、私はあの日以降に生まれた自分の子供たちにどうやって伝えればいいのか、今でもわかりません。でも、生きていけば何度でも立ち上がれるということは教えられると信じています。私の書いたものが、大切な誰かを失くしたり、心を痛めた人のそばに寄り添えるものになれるのであれば、これ以上の幸せはありません。これからもそれを目標に書き続けていきたいと思っています。

第8回ふるさと秋田文学賞 小説の部

ふるさと秋田文学賞佳作

停戦旅行

畠山政文・作

停戰旅行

色づいた木々が道路に沿った黒板塀を越えて枝を伸ばしている。が、春、あれほど咲き誇り、雑誌や新聞にも取り上げられていた枝垂れ桜の葉がどれなのかわからない。

桜が満開の時期には、通りを行き来する人々の頭上から、アーケード街の七夕飾りさながらにたれ下がる桜らしいのだが、どれがその枝なのか見当がつかない。秋になって水気も潤れて枝が軽くなって持ち上がったということなのだろうか。満開の桜の花や枝はそれほど重いのだろうか。

指先に乗せれば桜の花びら一枚でもしっとりしている。それが何万枚何十万枚何百万枚となれば、その花びらに水分を送る枝にももちろん水分は満ちているのだろうかから相当な重さになるのかもしれない。ふだんは跳ね上がり気味でも、その時期だけしっとり水気を含み、往來の人々の眼前まで降りてきて、咲き誇る姿を主張する、夏祭りに髪を上げて浴衣姿で練り出す娘のように――。

科学的な正解はきつとあるのだろう。だがそういうことはどうでもいい。科学的でも納得しかねることはあるし、非科学的でもすくと腑ふに落ちることもある。大事なものは納得しながら進むことなのだ。

芳彦は、もっとまじな人生があるはずだ、と思っているフシがある。自分で、フシがある、

とはおかしな物言いだが、自分自身のことなんてだれも分かるはずはないということに納得しているからこういう言い方をするのである。

だから芳彦がこの夫婦関係に実は満足しているのか、あるいは妥協しているだけなのか、それともすであきらめたまま人生の冬の季節に入ろうとしているのか、あるいは何か新しい生き方があると、本気で考えているのか、どうにも自分で自分が分からないのである。

夫婦げんかの上の流れではあったが、妻は初めて自分から「離婚」という言葉を切り出した。芳彦はそのことに少しばかりこだわっていた。今までその単語を繰り返すのは、芳彦の側ばかりだった。おそらく妻も自分で言っていることが分からないのではないかと思ったりしている。だが、入り口に踏み込むことがその後の道を決めることにはちがいない。

心に決めて、車に乗り込んだときから、ここ角館まで来たように、その場所に向けて踏み出したらその場所に着くのだし、その場所で動き回ることかさらにどこかに向かうのかはまたその場所での決意や気まぐれによる。

子どもが生まれてからずっときゅうきゅうと暮らしてきた。「習い、性せいとなる」という格言通り、そういう習いを三十年以上も続けてくれば、食器洗いの水道の水の細さやら、石油ストーブの芯の燃え具合やら、スーパーの半額セール時間帯やら、とにかく切りつめることにま

ず考えが向く。考えというよりそれはもうまさに性^{さが}である。それを自分だけが身につけてしまったのである。

美弥子は夏でもお湯で食器を洗う。手当たり次第に総菜を買ってきて、一口味を確かめて不味^ずければもう箸をつけない。食事が終わればそのおかずはパックごとゴミ箱行きになる。だからゴミ箱の大きな口より先に、自分の口に入れるしかない。すると栄養の吸収には律儀な内臓が活躍し、腹回りばかりが肥えていく。その繰り返しだった。

妻が儉約しないわけではない。が、その場面はすべて夫が提示したもののばかりである。

——チラシの裏が白い紙はとっておいてくれ。日曜大工の設計図や筆ペンの練習に使うから。発泡スチロールの箱も冷たいものを入れるときに使うからとつとつという……。そういう何度も繰り返し指示したことはするようになった。だが彼女は「三割引」以上の札のついた割引を買うとレジの店員に客として見くびられる、と言って二割引までのものしか買わない。こちらからすれば二割も三割も似たようなものだが、美弥子は野球選手でもないのに三割にこだわる。歩いて五、六分の百均に行くにも、歩くことはおろか自転車さえ使わず自分の軽自動車で行く。狭い芝生の雑草を抜いといてくれ、と言うと、近くのホームセンターから（もちろん車で行き来する）芝生だけ生き残る芝生専用の除草剤を買ってきて、三回分の量を一時^{いちどき}にばらまく、と

いうようなことをする。もつたいない、と亭主が言うと、甘い顔して最低限の量にすると、必ずしぶといやつが生き残る。根絶やし（美弥子は「皆殺し」という言葉を使った）にするにはこのほうがいい、と言う。一つの考え方には違いないが、亭主が伝えたい本質的なものが伝わっているとは思えない。

妻が使っている軽は燃費自慢の車のはずなのに、平均燃費はいつもリッターあたり五キロそこそこである。満タンで百五十キロも走れない。そして燃料警告ランプがつけば、ガソリンの値段に関係なく最寄りのガソリンスタンドに駆け込むのである。

だからこの一泊の旅もキャンセル料がもつたいなくて来たのである。大きな声では言えないが、コロナウィルスが世界を席卷している昨今、この旅行は一泊一万円ほどなのだが、GOTオトラベルの割引を使用しキャンペーンで当たったクーポンを利用すると手出しはほぼ無しということ、美弥子が予約したのだ。手間のかかる申し込みに思えるが、美弥子は段取りからすでに旅の中にいる気分で、スマホを駆使して予約を整えたのであった。

そしておととい、出発の二日前に、家の中が埃っぽいとい口に出した亭主に腹を立て、それと分かる不快さの露わな横顔を残像にするや、ソファから落ちて転がっていた丸いクッションを踏みつけ、夜の九時過ぎ、階段に掃除機をかけ始めるといふ始末だった。掃除機の吸い

込み口で階段の踏み板から蹴込み板からがんがん突きまくるようなかけ方だった。勢いで掃除機の本体が踊り場から転げ落ちたらしく、音に驚いてドアを開けてみると、二階のコンセントに差した電気のコードがザイルとなって、階段の中腹に滑落を免れた掃除機が身を横たえていた。

「いやだったら離婚してくれていいから！」

芳彦は驚いた。どんなに腹を立てても、その言葉だけは自分からは言ったことがない美弥子だったのだ。

こんなときに世の亭主たちはどう対応するのだろうか、といつも思う。

中にはひっぴばたく旧態依然の関白亭主もいるだろう。掃除機を階段にがんがんぶつける音を聞きながら自嘲する男もいるだろう。優しく諭す男もいるんだろうか、いやいやそんなできた男はそもそもこんな女と一緒になるはずもない。堪忍袋の緒が切れて離婚を決意する男もいないとも限らない。

芳彦は逃げるようになった。正解が分からないから答案用紙から逃げる。自分の動きや言葉が自分の答えということになってしまふ、それならばとりあえず保留だ。これは入学試験でも入社試験でもない。難解きわまる夫婦の問題だ。すぐに答えを出す必要はない。その場にいた

たまれなかつたら逃げるにしかず――。

二年前まで飼っていたムサシがいたときには、その相棒を連れて散歩に出たものだった。

「どうしておかあさんはあんなにすぐ怒るんだろうね」

ムサシはマーキングに余念がない。

「やれやれだな」

ムサシはぐいぐいリードを引っ張る。

「まったくヒステリー女だな」

ムサシがこつちを向く。

「……そうか、おまえには優しいか、そうだな。……でも超ウソツキだべ。結婚前に『お掃除大スキ!』なんてさ。ひどいべ」

そうやってこぼしながら一緒に歩いたものだ。三時間歩いた夜もあった。

たまには芳彦が外にいる時間で反省することもあるらしく、そんなときには部屋に入ったときに声の質が違っている。

「おかえり」

「……ああ」

「ムサシ喜んだでしょ」

「ああ」

「おとうさんと散歩するの好きだからね」

「ああ」

それ以外に何か言えるだろうかといつも思う。若い頃は、自分が被^{こも}った不快さをどうしてもやり過^すごすことができなかった。

「よくそんなところ声色^{こゝろ}変えられるもんだ！」

とかなんとか怒鳴ったような覚えもある。そうして今度はこつちから宣戦布告して不快な時間を投げやりに引き延ばしたりした。イヤな思いを同じ量だけ味わわせてから徐々に和解していくというようなパターンが多かったような気がする。だがそれは想像の中だけで、じつは無言だったのかもしれない。はつきりしない。過ぎ去った時間はもう立ちこめる霧の中だ。

二日前のその夜、したくもないパチンコをして芳彦は二時間後に戻ってきた。妻は熟睡していた。悔いたり反省したりして寝つけなければ、もう少し寝顔に理性が残っているはずなのに、魂が抜けたように口も半開きで眠っていた。たいしたものだ。亭主の不機嫌など、放っておけば形状記憶のワイシャツみたいに原型に戻ると高をくくって眠っているのだ。情けないこ

とにじっさいその通りになるのもしょっちゅうだ。特に還暦を過ぎたあたりからは、何が引き金で前夜に言い合ったのか思い出せないことさえあり、それを思い出す作業もばかばかしいような気がしている。けれど芳彦の胸の中には、お澱のようなものが沈殿し続けている感覚がないわけではない。

だが今朝はちゃんと出発してきた。

スマホのナビ機能を持つアプリとかいうものの指図どおりに車を走らせてここまでやってきた。東北自動車道の北上ジャンクションから秋田道に入り、大曲から山根というところをすぎ、国道105号線に乗り、三十分ほどだった。昼も近かったから駐車スペースを持つ食堂を探した。

町中にうってつけの店があった。

「ここでいいか」

「駅の方にも食べるところがあるよ」

スマホを見ながら美弥子が言う。

「せっかくならおいしいところがいいしな。駅前にはあるだろうな、行ってみっか」

芳彦が何かを決断して動こうとしたとき、必ずと言っていいほど美弥子は別の提案をした。

その自分の決断と対立するような別の提案がここまでの芳彦の人生の道のりを決定づけてきたとも言える。

その昔、芳彦は付き合っていないながらも、なにか、このまま結婚という門をくぐる前に考えるべきことがあったような気がしていた。だからプロポーズは口に出さなかつた。何を考えたかだったのか自分でも分からないのだが——腹を決める、というだけのことによせよ——もう少し結婚という言葉の土台になるようなしつかりした理屈とか決意とかそういうものを敷きたかつた。そんなとき、美弥子は、

「とりあえず一緒に暮らしてみない？ イヤになったらいつでも離れてあげるんだし」

と言った。そしてこまめに掃除もする同棲が始まった。なんだが落ち着きの悪い共同生活が始まったが、やはり少しずつ日常になっていった。美弥子の作る料理は美味しく、芳彦の草野球の応援にも欠かさず来て、声援を送るでもなくただ球場のバックネット裏に腰掛けていた。けだつたが、それでもいつの間にかチームメイトとも馴染み、たった一人の応援マスコットの存在になっていた。

思いがけず妊娠したときも、

「イヤなら一人で育てるから生ませて」と言った。

つまるところ、理屈で答えは出ない、ということを知るための同棲期間だったような気がする。

芳彦はもともと気が小さく、何かをするときにいちいち人の顔色を窺う性格だった。そして多くの臆病者がそうであるように根は真面目である。

美弥子を女手一つで育ててきた母が、つわりで苦しむ美弥子の世話のために、いきなりアパートを訪れて来たとき、何も訊かれもしないのに、芳彦が、

「そろそろ婚姻届を出しますから」

そんな言葉を口走ったのも、そういう性格からの総合的な解答だったのだ。

「同棲」という言葉が何年前か前に映画の題名になり、あちらこちらで口に上る時代にはなっていたが、美弥子が「とりあえず一緒に——」と言うから「とりあえず」過ごしていただけ、という口実を芳彦は自分に言い聞かせていたのだった。が、していることは同棲そのものだった。小心者には無理があった。誰に対しても説得力のある説明はできそうになかった。結婚しないことが男のエゴで、狡いこととイコールにしか思えなかった。そして「同棲」は新しい言葉で、まだ巷ちまたの路上や酒場にふわふわ浮いているだけの言葉だったが、芳彦にすればどう考えても女に不利な関係のように思えた。その暮らしいつも芳彦の罪の意識を突っついていたの

だ。だから突然訪れた美弥子の母親にどんな申し開きもできなかつたのだ。

NHKの大河ドラマでは何年かおきに家康の時代が題材になる。そこでは関ヶ原と大阪の陣は欠かせない場面である。大阪夏の陣で外濠、内濠と埋められて追い詰められていく豊臣側の憤怒の顔が映る。壕の有無が存亡を握っていることを誰もが分かっている。芳彦はテレビに見入っている美弥子の顔を横目で見る。ただドラマを味わっている顔に見える。が、家康役の俳優が、それとなく醸し出す微妙な「得意」や、抑えようもなく立ち上る「満足」は、その俳優が目尻や結んだ唇の端に浮かび上がらせるよりも自然に、美弥子の顔にも浮かび上がっているように思える。壕が土砂で埋め立てられてゆくのを眺める家康と、その画面を見る美弥子の顔が同一人物に見える。美弥子のまわっている空気は家康よりもさらに家康らしいもののように感じたりする。

芳彦は壕が埋められているのを前にして、たった一人その意味するところに気づかず、空を仰いで曇り空が続くことばかり気にしているような、かなりめでたい役柄だったかもしれない。

岩手ナンバーの軽自動車は駅前のロータリーまで行った。たしかに駅前らしく食べるところはいくつかあった。が、当初の思惑では食ってから腹ごなしに歩く、というものだったので、

いくら何でも遠すぎるような気がした。それに店のメニューが並んだスマホの画面をいくら見ても、写真とひと言の紹介文だけでは、味など分かるはずもないのだ。店をよく知った常連の誰かに連れて行ってもらうようなことでもない限り、とにかく決めた店に入ってみるしかない。そして美味いか不味いかはその日の運だ。

「結局引き返すんだよね」

「駅まで行こうって言ったのはそっちだべ」

「食べるところがあるって言ったんだよ」

「おんなじことだべ」

わざわざここまで来て——、という思いが車の中にはある。

だから美弥子は故意に刺さるような言葉は口に乘せない。そもそも話し方が家にいるときと違っている。外向けの発声になっている。それは満たされた時間の中にいるという気持ちと表情からくるもののように思われる。頬がほどけて口角がいつもより上がっている。口の形が違えば声の響きも違う。旅行中、美弥子は無益な緊張状態に持ち込むことをしない。その姿勢はよほどのことがない限り崩れない。それだけはあるがたい。

それは芳彦にも言える。

旅の上にあるとき、つい率直すぎる言葉やトゲのある言葉が出てしまうことがある。いくらマスクをしている昨今でも言葉はマスクの有無に関係なく飛び出す。が、その言葉は、いつものぴりぴりした堪忍袋に取り込まれてうごめくことはない。エアコンの排水ホースのように体のどこかを素通りして外にそのまま排出されるような具合になっている。その切り替えスイッチが、「せっかく」という言葉を冠した「ここまで来て」とか「それなりの代金を払って」というものであることは、これもお互い暗黙の了解事項だ。

「貧すれば鈍する」と言うが、旅は貧しいてはできない。貧すれば家に籠もるよりほかはない。そして籠もっていれば諍いさかいは多くなる。コロナを引き合いに出すまでもない。結婚生活が三十年以上も過ぎ、やっとここ数年、安・近・短の揃そろい踏みぶみとはいえず、年に一度こうして岩手から東北のあちこちに泊まりがけの旅行ができるようになったのである。金と手間と時間をかけたあげくに険悪な空気を呼び寄せるとするのは、どう考えてももつたないのである。

竜の首に一枚ある「逆鱗げきりん」は、普段は忘れてはいるが何をもってしても解消できないコンプレックスの鱗うろこである。触れれば触れた者はたちまち竜に八つ裂きにされる。美弥子には逆鱗が数枚ある。嫉妬の鱗、掃除や片づけの鱗、学歴の鱗、口べたの鱗……。その鱗をめくるような

触り方をしない限り、美弥子がクッションを踏みつけたり、夫の全身の血管がすぼむような表情になることはない。だから「おんなじことだべ」ぐらいのひと言は、竜の背中の中のツボを押すようなものだ。たまの読み違えはないこともないのだが、反応を見る限り読みどおりだ。唇はかすかに尖ったように見えないこともないが――。

家の電話での応対、二人でよその人に会う時、芳彦の実家に行き兄夫婦と話すとき、美弥子の笑い声はいつもの「へへへ」がいつのまにか「ほほほ」になっている。結婚前にも聞いたような笑いだ。

「何食べる？」

「一つは親子丼、比内地鶏のやつだべ、やつぱり」

「あと一つは？」

「麺ものだな。好きなのでいいよ」

「稲庭うどんか味噌ラーメン」

「どこに行っても地元の味と味噌ラーメンの対決だな」

「味噌ラーメンもその店で味が違うからね」

美弥子はなんととっても味噌ラーメンが好きなのだ。そしてその半分を芳彦も食べることに

なる。二人で二つ注文して半分ずつ食べて二つの味を味わうのが外食の時のパターンだ。どんぶりのやったりとったりも、ただの会話のように当たり前になっている。それがいつ頃からなのか、すでに記憶の底に沈んではつきりしない。

初めて向かい合って同じカツ丼を食べたとき、芳彦はいつものカツ丼がなんだかごろごろして食いつらかったのを憶えている。やつのことで全部食べた。どんぶりに残ったいくつかの米粒さえもう口に入れることができなかつた。そのタレの染みた数粒の米を恨めしい気持ちで眺めた。美弥子は半分も食べなかつた。食べ物を気持ちよく食べる女を妻にするべきだと書いている雑誌の記事を思い出しながら、向かい側に置かれたどんぶりの崩れたご飯の上に残った三切れのカツを見ていた。本来の自分なら美弥子が残したのも軽く胃の中へ流し込めただろう。馴染みの店の一押しのおべ慣れたカツ丼を無理に口に入れていて自分も、そもその胃の容量も、残すんだつたらそれ貰うよと言えない自分も、全部いつもの自分ではなかつた。

いつ頃かかほぼ必ず別々のメニューを頼むようになった。せっかく一度に二つの味が味わえるチャンスなのだし、もつたいたくなくて同じメニューは注文できない。

迷ったあげく美弥子は稲庭うどんにした。周りを見回して、味噌ラーメンを食べている人も注文する人もいなかつたからだ。

料理が運ばれて来る。マスクをはずす。つかの間、口もとが開放される時間だ。今流行のバーナーで炙ったものか、焦がされた鳥の皮は甘じょっぱいタレと相俟って香ばしい匂いを立ち上らせていた。これを味噌ラーメンと交互に食べたら味覚が慌ただしいことになりそうだったな、と芳彦は思った。

稲庭うどんはしなやかな弾力と艶をもつさすがの麺だった。

そのどんぶりは向かい合った芳彦と美弥子をちょうど二往復して空になった。

二度目の親子丼、全部いいよ、という芳彦の言葉を受けて、美弥子はどんぶりを顔が隠れるほど傾けて比内地鶏の最後の一切れとご飯を掻きこんだ。これがカツ丼半分から四十年後の美弥子である。中にあるものが現れてきたにせよ、しだいにそうなたにせよ、たぶん今が自然な美弥子である。大昔、縄文式土器で食べていた淑女にしても、明治時代の農家の末娘にしても、これが器の中に残った食べ物を食べ尽くす際にもっとも理にかなった食べ方なのにちがいない。

かるくお茶をすすって通りに入る。そのためにここで食べたのだから、駐車場にまだ空きがあるのを確かめてから車は置いたままにする。

行き来する人は大人から子どもまで、乳母車の幼児以外はみなマスクで口元を覆っている。

こんな光景にこのごろは何の違和感もなくなった。

さつきまで薄い雲に遮おほられていた空から小春日が差してきているせいか、腹ごしらえをすませたせいか、足が軽くなった、と感じたとき、

「歩くの、気持ちがいいね」

美弥子が言う。

「ああ」

そういうことだ。

二年前に二人で夕方散歩をしたことがあった。家を建てて移り住んで二十年以上にもなるが、狭い路地や一本裏の通りがどんな通りなのかよく知らないで暮らしていた。その界限を二人で歩いた。歩いてみたいと思ったのだ。職場の健康診断でひっかかり、再検査でもかんばしくなく、検査入院までの一月半、芳彦の気分がふさいでいた時期だ。検査入院を指示した若い医師は、いかにも冷静に憂うべき可能性を語った。その憂うべき病気に関する知識や治療経験を披瀝ひれきするのに得々としているようで、その手術や闘病の例えを事務的に言った。悲観することはない、事実は変わらないと、とりつく島もなかった。ずいぶん冷たい言い方だと思ったが、何かを訊けば恐ろしい言葉しか返ってこない気がして、一刻も早く診察室を出たかった。

その医師の声は芳彦の意思に反して何度も頭の中で反芻はんすうされた。そのせいなのかは分からないが、芳彦は偏頭痛や不整脈を感じることも多くなった。心配性で臆病な自分はいよいよ最悪のことを考えてしまうのだった。

美弥子は気に病むからだと言った。気にしなければいいと言った。まだ最後の検査が終わってもいけないのに、取り越し苦労をしても仕方ないと言った。

自分でもそれは理屈では分かっていたが、体の不調は現実のものだった。芳彦がネットで調べると、そういうストレス状態の時は散歩がいいと載っていた。そこで二人で歩いたのである。たった一度の、日が沈みきって宵闇が濃くなるまでの二時間ほどのその散歩が、なぜか芳彦にはしばしば思い出される。ゆっくり歩き、静かに話した。悪くない時間だった。

検査結果はシロだった。医師は自分もそんな気はしていたと言った。しかし芳彦の偏頭痛と不整脈はそれから一年以上も続き、それは今でも忘れた頃に襲ってくるようになった。

あのときの散歩のようだった。静かに話せる。

通りを歩く観光客もせいぜいが四、五人の家族連れで、何十人ものツアー客をそろそろと従えて、ガイドや添乗員が旗を差し上げながら歩くような一団はない。

「静かでないな」

「外国人いないもんね」

「『禍福はあざなえる縄のごとし』と言うがな」

「何それ？」

「禍はわざわい、福はラッキー、あざなえるってのは、二本の紐を縫ってあるってこと。——
ロープとか紐ってのは二三本縫ってあるべ。いいことと悪いことはいつも一緒にあるってこと
だよ」

自分は祖父ちゃん子で、いろいろなことわざだのしきたりだのを聞いて育った。だから分からない言葉を使ったときには、素直に訊いていいと、と結婚後には言い続けた。やっと最近素直に訊けるようになった。

美弥子は何か分からないことがあるとき、困ったような顔になって黙ることが多かった。わからないことを恥ずかしいと思うらしかった。高校を一年で退学したことがコンプレックスになっっているのは、話題がその頃のことになると話をそらすことに表れるような気がした。娘たちの三者面談にも行きたがらなかった。

「コロナもかなり迷惑だけど、観光地が静かなのだけはいいい」

「ふつうに喋れるしね」

「人が多いと疲れるしな」

「ツイッターで言ったら『炎上』すっかもしれないよ」

「静かは静かなんだから、それだけはいい」

二、三年前に仙台のホテルで午前四時頃に廊下で大騒ぎしている集団があった。中国語のようだったが、尋常な声の大きさではなかった。まるで口論しているようだった。思わずフロントに電話したものだ。トに電話したものだ。

通りを歩いていくと黒板塀が続きその切れたところが門になっている。「小田野家」という表札がある。臙脂^{えんじ}、黄色、山吹色、まだ青い葉、いろいろな葉をつけた枝が黒板塀の上から通りに差し出されている。すぐ奥に杉の巨木、少し足を踏み入れると橙色^{だいだい}や赤い葉も見える。

雪囲いなのか縁側の外に、軒までの高さの広い格子が立てかけてある。長い材木を結わえて作っている。外から内部が見えるように障子は開け放たれており、二間続けて囲炉裏が切っ作るのが見える。この囲炉裏を囲んで家族が集まったのだろう。もしかすると儉約家の主が、隣り合った部屋なのだから囲炉裏は片方でいい、と言ったかもしれないし、あるいは主は太っ腹で、けちけちなしないで両方に炭を持ってきて暖める、と言ったかもしれない。いずれにしろそこに人々が毎日を暮らしていて、この地方の言葉だけが使われ、湯気の立つ料理を食べ、笑い

あつていたので。今はその跡だけがこうして残されている。この畳を踏みしめて生涯を終えた人々はどこかへ行ってしまった。

通りに戻ると、隣の門には「川原田家」とあり、工事中のような赤いコーンが置いてある。まもなく公開を中止する期間に入ると張り紙がある。

こういう場所や美術館のような場所には「歩き方」というものがあるような気もするのだが、芳彦も美弥子もそれを知らない。どこまで入っていつてどれくらいの時間を、どう味わいながら見ればいいのか分からない。美弥子の好きな芸能関係の展示があるわけでもない。タレントがいるわけでもない。ここまでの規模ではないが、二人が幼かった昭和の中頃には古い家が周りにいくつもあり、別段珍しいものでもなかった。むしろトタン屋根とか玄関の周辺がタイル張りになっていて新しい建築様式のほうに心惹かれたものだった。

また少し進むと「岩橋家」。また中に足を踏み入れてみる。ここも建物に沿って雪囲いの準備なのか格子が立てかけてある。またすぐに出る。美弥子はひとまず芳彦の歩みについて歩く。あまり興味がないのは芳彦には分かっていて。だが美弥子なりに興味があるかのごとく首をあちこちに向けながら歩いている。これも旅の空気を支えるための所作である。

また黒板塀の通りに入る。突き当たりを左に折れすぐに右に折れるとまた広い通りがある。

「内町武家屋敷通り」と標示がある。

「青柳家」

「立派な門だね」

「ここはお金がかかるんだな」

門の内側のかつて門番が詰めていたであろう小屋が入場の料金所になっている。

一人五百円ならば手頃な値段だ。パンフレットをもらい、入る。「角館歴史村・青柳家案内図」という立て看板を見る。パンフレットと同じ図だ。今入ってきた門が「薬医門」というところらしい。

「武器蔵」には文献や甲冑が保存されている。赤い陣羽織の前に家宝だという鎧と刀が置かれている。

「鑑定したらいくらぐらいなんだろうね？」

美弥子と言う。

骨董品や値打ちのありそうな小物を目にする、どちらからともなくそういう言葉が出る。視聴者の所蔵する掛け軸から腕時計から焼き物からサイン入りのスポーツ用品、あらゆるものを鑑定する人気番組を夫婦でいつも見ているからだ。何が何でも、というほどではないが、録

画しておいて、夜のテレビにめばしい番組がないとき、気まぐれに録っておいたこの番組をコーンシヤルを飛ばし飛ばし見たりする。見ればすぐ消してしまふ。

この番組の何に惹かれるのだろうかと芳彦は考えることがある。この番組のファンは高齢者が多いらしい。地方を回って鑑定するコーナーでも会場を埋めているのは高齢者が多く、出品者もその年配が多い。借金のカタに貰った絵、先祖代々伝わる掛け軸、金に飽かせて手に入れた名人制作の焼き物、そういったものを見る目のある専門の鑑定家が見定め、値をつける。数千円で買ったものが一万円のこともある。悪意のある偽物だと千円にさえなる。反対にただのリサイクルショップで埃をかぶっていた絵が実は名のある画家のもので何千万円の値が付けれれることもある。落とされるのも面白い。見出されるのもしてやったりだ。

芳彦はこの番組が人気なのは、庶民の思いを語っているからだと思う。

その品物に、世の人間を投影して見ていのではないかと思うのだ。

つまり、偽物のくせに、偉そうにして高い地位についてふんぞり返っている人間、そういう輩は見る人が見ればすぐに化けの皮が剥がれるのだぞ。実力もなく世渡りの狡猾さで何様になつた気がしているかもしれないが、ものの分かった人が見れば何の力も魅力もないではないか、思い知れ――。

というような、そういう者の下で働き続けなければならなかった庶民の無念を晴らしてくれる場面があるからだ。

逆に、これまで長い間誰も見つけてはくれなかったが、目のある人が何かを感じて手に入れた物が真の価値を正當に評価してもらええる場面もある。それこそが自分である。その見出されることの救い。雪辱。それもあるのだ。

だから世間で成功していると思われる人が、余って遊んでいる金をつぎ込んで手にした物が落とされるとき、見ている庶民は胸がすく思いがする。そして見かけが誠実そうだけれどもなんだか運がなかったような人が、母の形見として大事に守ってきたような物が素晴らしい価値を持つものであったと分かってもらえた瞬間に、やっと報われたような気になる。そのどちらかの終わり方だと番組を見終えてカタルシスを得ることができぬ。

その逆もまたある。狡そうな人の本物。真面目そうな人が守り続けてきた偽物。だがそれもまた人生の一面であることは、視聴者の老いた者たちは承知している。それはただ受け入れるしかない。滑稽な場面と重い場面が交錯するが、それを進行する者たちが庶民の側から軽やかに扱う。どんな結果であれ、吹っ切り、さばさばした表情で参加者は明日に向かう。それがこの番組の味だ。

「水戸黄門」や「大岡越前」という勸善懲惡の人気番組に通ずるロマンと、寂しい現実を兼ね備えた番組だ。どれも真実だから見る者は納得するしかない。「水戸黄門」を見て画面の中に酔うのとは違う。作り事の中で幸せをつかむ架空の人ではなく、現実を見届け、実在するその人に祝福や励ましを贈りたいのだ。

自分の価値が自分でも分からず、だれにも取り立ててもらえず、芳彦は学習塾のただの経理係でサラリーマン生活を終えようとしている。同期の者たちが次第に増えた分校の事務長や責任者となっていくのを送り出しながら、帳簿を眺めるばかりだった。年月を経てそれがそのままパソコンの画面になり、いったん定年退職して正社員から嘱託になっただけだ。別にそれのことさら惨めだと思ったことはもちろんない。人には向き不向きがある。人事考課はほぼ適正だと認めている。けれども何かなかったか、と思う。見る者が見れば分かる芳彦だけの長所や才能のようなものはなかったのだろうか。

娘二人は幼い頃はお父さん子ではあった。その頃が芳彦が一番認められていた時期かもしれない。けれど二人とも中学に入ったあたりから部活動だの友達との遊びだのに夢中になり、高校でもその通り、興味は家の外になった。上の娘が仙台の大学に進学すると、一人になった下の娘は反抗期なのか、いちいち親に食ってかかることが多くなった。売り言葉に買い言葉で

激しい応酬になったこともあったが、三年生になるとなんとか落ち着いて、大学は東京を選択し、そのまま就職し、コロナもあってもう二年も会っていない。べつにそれで寂しそうでもない。携帯電話もあるのだし、無事な声がたまに聞ければそれでいい。

「解体新書記念館」には解体新書の附図を描いた角館出身の小田野直武のその附図や絵が掛けられている。掛け軸の女性の絵は、顔が浮世絵のそれのようにも見え、構図としては中国の人物画のようでもあり、雰囲気としては竹久夢二の女性画に見られる儂さはかなのようなものも漂っている。

そんなことを思っても、こういう静かな田舎家の建物の中で、美弥子には言えない。美弥子は絵に興味がないから反応の仕様がななのだ。芳彦の感じることなどありきたりのことに過ぎないが、それは口に出して美弥子に差し出すべきものではない。それは自分の胸の中でころころと転がしてみるだけの単なる感想だ。この感想を査定してくれる人は芳彦の周囲にはいない。芳彦は絵が嫌いではないから薄暗い建物の中でその絵に近寄ってみたり隣のものを見比べてみたりもしたいのだが、美弥子はすでに外に出てしまっている。

兜かぶとをかぶる体験をおどけたふりをして芳彦はやって見せた。ガラスケースの中の片刃槍を穴から手を入れて持ち上げてみたりした。せつかく、がやらせたのである。——ここまできたん

だから。

「武家道具館」があった。のぞいてみると武家の道具というよりは、武家の生活を支えた道具という感じで、熊手から盥たらいから鋤すきや鍬くわといった生活用品がまず目につく。奥にはライトを浴びてきらびやかな器類うつろが緋毛氈ひもうせを敷いたガラスケースに収まっているが、ふだんの道具は入り口の壁に立てかけられて重なっている。だがそれが当時の彼らが実際に握り汗した道具なのだ。

ぐるりと敷地を一周し、出がけにまた母屋の端の座敷を眺めたとき、ふと「厄介やっかい叔父おじ」という言葉が浮かんだ。武家の跡を継ぐのは長男である。次男に生まれた者は武功を立てて他家に婿入りでもない限り、自立する道はない。生まれた家で、畑を耕したり甥や姪に学問を教えたりする。しかしそれも跡取りや娘が幼いうちばかりで、やがて自分は老い、家の食い扶持を無駄に減らすだけの存在になる。酒も飲めず嫁ももらえない。そういう立場を「厄介やっかい叔父おじ」と言うのだと時代小説で読んだことがある。庭の木々を眺めている孤独初老の男が殺風景な角の座敷の濡れ縁に座っているような錯覚に襲われたのである。

「どうしたの？」

ぼうっとしてゐる芳彦の横顔に美弥子の声が触れる。

「いや、——昔もここに引きこもってた男がいたんだろうなと思ってさ」

「たぶんいつでもいるんだよ」

ここで「厄介叔父」の説明はちよつと難しそうだ。

「でもこの間のひと言、よかつたね」

「この間のひと言？」

「ほら、塾での不登校相談の——」

ああ、と芳彦は思い出した。

芳彦の勤める学習塾は、もちろん一流校に進学する生徒も育てているが、その途中でつまずいたり、学校に行けなくなつてしまつた子どもの相談にも乗っている。進学一辺倒の金儲け塾とは一線を画した本質的な教育施設であることを標榜しているので、地元の信頼は厚い。

その日、芳彦は年二十万円の予算を計上している経理課の立会人として、ただ座つて会を見ていた。

二時間と設定された会では、前半は保護者だけの会。後半一時間は子どもも参加してもいいことになっている。が、じつさいここに来る生徒はほとんどいないのが常だつた。たった一人、母に連れられてきた中学生が、ぼつぼつと自分の気持ちを述べていたが、いきなり泣きな

がら叫んだ。

「お父さんは、僕を失敗作だって！ お兄ちゃんもお姉ちゃんも頭いいのに、僕は失敗作だって！」

居合わせた塾長や講師や保護者の戸惑いが空気を固め、沈黙が襲った。

「それは違う！」

芳彦は自分でも驚いた。なぜ自分がこんなところで声を出すのか——。ただこの沈黙を長引かせてはいけなさと感じたのだ。

その中学生をはじめ、四角に並べた机の上のどの顔もが、芳彦を見た。続く言葉を促しているのが分かった。

「……お父さんはさ、国語が苦手なんだ。国語ってなかなか百点とれないだろ？」

その子は泣きながら芳彦を見てうなずく。

「難しいんだよ。言葉って。どう言ったらいいか分からないんだ。相手が大事なら大事なほど間違った言葉を使っちゃったりするんだ。ほんとに好きな子には好きって言えないよね。そんなもんなんだ。お父さんはね、君が大好きだって言いたいんだよ。頑張れって応援してるんだけど、疲れちゃうこともあるんだよ。そんなときに言葉を間違えるんだ。本当は『大好きだ。』

いつでも応援してるぞ！」って言いたいんだよ」

反抗期の次女に荒い言葉をぶつけてしまった記憶がよみがえっていた。その時に相談した老講師の言葉だった。

「わかりましたあ……」

しゃくり上げながら、中学生が芳彦を見て言った。

会が終わると塾長が、いいお話でした。泣きそうになりました。と言ってきた。

この話をすべきかどうか迷ったあげく、芳彦は、半分飲んだきりで冷蔵庫の奥に寝ていたワインをコップに五センチほど飲み、酔って上機嫌になつての自慢話のような言い方で美弥子に教えた。自分の声が終わりの方で泣き声みたいになつたことは言わなかった。塾長が、ポーナスを自分で好きなかだけ増やしていいと言った、と冗談を加えた。

美弥子は本気で聴いているんだか、スマホをいじるついでにふんふんと言っているだけなのか、なんだか分からないような聴き方だったが、胸の中には残っていたらしい。

昔から、野球を見に来てもただ座っているだけ。芳彦が盗塁を決めてもガッツポーズするわけでもない。日曜大工で椅子をこしらえても、ただ座って少し笑って「いいね」で終わり。一度でいいから「すごい！ 最高！」と思いきり褒めてほしいのだが、なかなか叶わない。人

はみんな言葉を選ぶのが下手だ。

けれど今の美弥子のこそうれしいひと言だった。

「写真撮ってやるよ」

枯れ葉だらけの庭の隅に美弥子を立たせる。

旅で使う「せっかくここまで来たんだから」を人生の旅で使うことはできるんだろうか。

スマホを向ける。少し拡大する。不器用な妻が、いつものように上手に笑えないまま立っている。拡大しすぎると皺が目立つ。少し戻す。

シャッターを押す。

この写真は値段をつけられない、自分だけのものだ。

武家屋敷を出たら、手をつないで歩いてもいい、と芳彦は思った。

停戰旅行

小説の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

言葉という不思議なもの

畠山政文

還暦も過ぎてそこそこ経ち、仕事も四十年以上もやってきたのに、いまだに言葉で苦勞している。場に即した常套句や社交辞令が苦手である。どうしてもその言葉が空っぽに感じてしまいう自分がいて、自分の中から出てくる言葉だけで話したり書いたりしたくなる。

その割には、調子のいいお世辞にめっぼう弱くてすぐにたぶらかされる。あの時あんな言葉をくれた人が——と、こちらからすれば裏切られたような気持ちになることが少なくな

い。
だから文学の片隅は心地いい。文学の中心地はきつと「都



会」のようなところで、田舎者の自分が惑わずに生きていけるような場所ではない気がする。そこにはやはり現実社会と同じように、渡るための言葉や受け狙いの言葉と真実の言葉が混沌としてあるにちがいない。私はその言葉を見分けることがヘタだ。そして評判の高い最新の人気作品もどがすごいのか分からなかったりする。そもそも何が「ブンガク」というものなのかもよく分からない。

そんなこととは無関係に、自分が原稿用紙やパソコンに向かうときにはとても心地がいい。今回「佳作」として評価していただきました。ありがとうございます。二度目です。はじめて応募したときの授賞式での、「必ず現地に行くべし」という審査員の先生の言葉はずっと大事にしています。読んだ人にその舞台の空気を作品の中から感じてもらえれば本望です。

前回もそうでしたが、プロの視点から自分の作品の講評をもらえるというのは希少な機会であり、とてもありがたい（ちよつと怖い）身の引き締まる副賞のように感じます。読み返すたびに考えることが生まれます。その機会をまたいただけただけのことを何よりも嬉しく思います。

来年もなんとか仕事の合間を縫って秋田の地を訪れ、その空気と胸の中の物語とを融合させ、自分の中にある言葉で、より濃やかな小説世界を作り上げたいと思います。

第8回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞

大地と共に我ら生き

石原敏子・著

大地と共に我ら生き

長野県から八郎瀉干拓地へ第四次入植して五十年が過ぎた。

信州人は「あの山の向こうに何があるのだろうか」と思つて暮らしていると云われている。

私が育つたのは長野県と群馬県の県境の山間の窪地に固まっている小さな集落で、樹木が生い茂り周りの山山が迫ってくるようだった。幼い時から、山の向こうにはどんな景色が拡がっているのだろうか、知らない世界を見たいものだといつも思つていた。

日本海から西風が強く吹きつけるこの地で暮らすようになって、あの時自分は実際に山の向こうに何があるのかを確かめたくて飛び立ったのだ。好奇心と憧れの軽い気持ちだったのに、下した決断は重いものだったことに気がついた。

湖を干拓してできた大地は、平坦で起伏がなく、山は遙か遠くに霞んで見える。体が不安定で心もとない。行く手を阻むようにしていた山山や圧迫を感じた樹木に守られ安らぎを与えてもらつていたことに気がついた。

大きな木が欲しい。心の支えとなり抛り所となる樹木が欲しい。

庭のまん中にけやきの木を植えた。

私の背丈と同じで太さは赤ちゃんの腕くらい、この木が成長して木陰を作る頃、この地になじみ、根を張つて生きていたいと願つた。

けやきはぐんぐん背を伸ばし幹を太くし枝を拡げていった。木陰にブランコを置き支柱にロープを掛け一方を幹に結んで洗濯物を干した。三人の子供たちがブランコを揺らし駆け回る光景に安らぎと満足を覚えた。木立の拡がるのを見上げているうちに年月が過ぎていった。

私たち夫婦はこの地の気候風土になじみ、友人や知人も増えた。配分された農地は家から十三キロ離れている。春先から収穫が終わるまで弁当を持って行き、農舎で体を休めた。減反政策で畑作に取り組んだので天候を見ながら夢中になって働いた。四十年の歳月は瞬く間に過ぎたような気がする。

けやきの太い幹から何本も分かれた枝はさらにたくさんの枝を天上に向かって伸ばして庭の大半を覆いつくし花も野菜も育たなくなった。伸びすぎた枝は電線を隠して電力会社の手を煩わせたりした。こんな大木になることを考えていなかった。屋敷内に大きくなる木は植えるものではないということ、こういうことだったのだ。

見上げては、ため息をついた。大きな木が欲しい、成長することを願い、木陰を楽しんだというのに我ながらなんと薄情なのだろう。

長い間迷った末、造園業者に頼んでこの木を切り倒すことにした。二股に分かれた幹の下の部分から根元までの一番太い部分を残してもらおう。長さ二メートル、太さ六十センチの丸太か

ら記念になるものを残したい。

入植した当時のあの心細かった気持ち、茂りを見上げて心が安らいだことは忘れてはいない。そしてなによりけやきを植えた責任と切り倒したことに贖罪の気持ちがある。

丸太を農舎の前の空き地に横たえてやり一年間乾かした。太陽と風と雨に晒されて皮に割れ目ができ、切り口は黒くなっている。これからどうすればいいのだろう。

電話帳で探して、隣町の木工所へテーブルを作って欲しいことを相談した。電話口の主人は話を聞いた後、その木を製材所で十センチの厚さに切ってもらうように言った。そして日陰に干して五年経ったらテーブルを作ってあげるからと、自分の工房の場所を教えてくださいました。五年後、なんと長い時間が必要なのだろう。

軽トラックの荷台に載せて国道沿いの製材所へ運んで行った。丸太を見て注文をすぐに承知してくれ、やっていた仕事を中断して台の上に手術をするように置いた。側面が切り落とされると黒ずんだ皮の中から木目がくつきりとした木肌が現れた。年配の作業員は機械の手を止めて近くにやって来て、中がきれいなので十センチの長さを三枚とって、両側から薄い板を何枚か作ったらどうかと言った。私は大きく頷いた。

三枚の厚い板と三枚の薄い板を積んで帰る時、元の仕事を始めた作業員にていねいにお辞儀

をしたら、運転をしたまま左手を上げて応えてくれた。

六枚のけやきの板を車庫の壁に一列に並べて陰干しをする。最初は木の強い香りが辺りに漂っていたが夏を迎える頃には淡くなりいつの間にか消えていた。

それから七年、そこにあるのが当たり前のように板はずっと立て掛けられていた。春先、種籾が配達されると息子は薄い板を敷いてその上に積み上げたりしていた。そろそろ動き出さないと時間切れになってしまう。

工房に電話をすると、もう歳なので仕事をやめようと考えていたと言った。なんとか間に合ったらしい。声の張りから青年だと思いついていたのだが、材料を持ちに来た工房主は私と同世代を生きてきた誠実そうな職人だった。

六枚の板を使って食卓テーブルを作って欲しいことを頼むと、体調を見ながら作業を進めて行くので長い時間がかかることを承知してもらいたいと言った。決して急がないシデザインもお任せする、塗装は専門家に頼んで欲しいことを伝えた。板が無くなった車庫は本来の板壁になり、あの木たちはどのように加工されているだろうと思うことはあったが進み具合を聞くようなことはしなかった。あの真面目そうな人に失礼にあたるような気がしたのと、待つ楽しみも湧いてきたからだ。

ちょうど一年後「待たせてしまったけれどやっと出来上がりました」と連絡が来た。とうとう完成したのか。楽しみなのと期待をしすぎてがっかりしないようにしなければの気持ちか複雑に混じっていた。

完成したテーブルは重いので食堂で組み立てられた。三枚の厚い板は接ぎ合わされて幅七十五センチ長さ百三十センチの表面になり残りは脚とそこに渡した棚も付けられていた。工房主は残りの板から長椅子ができたと渡してくれた。ベンチにもなるし小さなテーブルとしても使えるからと笑顔で言った。あの板を目一杯活用してくれたのだ。りっぱな職人の技と誠実な仕事に静かな喜びが湧いてきた。

出来上がった製品を、太平の奥にある塗装屋へ運んで行ったら「こんな仕事をするのは久しぶりだな」と懐かしんだという。そして合板と違って熱や傷に弱いので注意するように伝えて「使っているとそれも味わいになるけれどね」と笑って、こういう仕事はおもしろかったと付け加えてくれた。私は封筒に入れておいた予定していた金額よりもずっと少ない代金を感謝を込めて誠実な店主に渡した。

大きな木が欲しいと植えたのが四十年前で手に負えなくなり切り倒したのが九年前、この地で暮らした歴史になる。小さなベンチは椅子としてちょうど良い。三度の食事は家族四人が向

かい合つて座る。テーブルの前に座つて木肌をなでてやると、今までのことが次々と浮かんでくるのだろうかと思つていたけれど、そんなことはなかった。みんな記憶の底に沈んでぼんやりとしたものになつてゐる。形として残つてゐることは三人の子供を育てたことと、木を植えてそこからテーブルを作つたことだろう。

食事の後、テーブルをていねいに拭う。薄茶色の塗料の下からは木目のはっきりと見え大きな曲線が流れるようにうねつて波のように見えたり、小さな渦巻であつたり幾重にも拡がる丘陵のような場所もある。幹の中ではこんな自然の造形が出来上がつていたのか。すごして来た歳月をなぞつてゐるような気持ちだ。

二年前に行われた第四次入植記念式典では、入植者百四十三名のうち五十一人が物故者となつてゐた。あれからさらに何人かが亡くなりさらに増えた。二十歳の青年が七十歳になつた年月だからやむをえないことだろう。

十一年前、夫は心臓の手術の後余病が併発し農作業は無理な体になつてしまった。大柄で穏やかな夫はいつも機嫌良く働いてゐた。無農薬の田んぼの除草機を押し、四十キロあるミスト機を背負つて畝間を何往復もした。土で膝まで茶色に変色したズボンは、いつも農舎の脇に干されて揺れてゐた。今年の春先ビニールハウスに敷マルチをした時、押さえになるものを探し

たら空き地に長く太い四角の鉄棒があった。ひとりでは持つことができないので息子と二人で運んで風にはためいている場所へ置いた。これは夫が、農舎のシャッターが風で飛ばされないように横の支えとして作ったものだった。輕輕と持ち上げて運んでいた時もあったのだと思つたら、普段は嘆くことはしないのだがちよつと涙が出た。

現在、夫は杖をつき曲がつてしまった腰をかがめてゆつくり歩き、週二回りハビリに通つている。夫の姿は、この地で働き戦つて頑張つた負傷兵士のようなものだ。

人間の五十年は、長くて中身がたくさん詰まっている。ひとつひとつ乗り越えて思い出があるはずなのに、茫茫としていて具体的には浮かんでこない。ただはつきりしていることは、私の人生は夫と共にこの大地で営農をしてきたことだ。大地と共に生きてきたのだとしみじみ思う。「大地と共に我ら生き」と言葉にして言ってみる。

私にはまだまだやらなければならぬことがたくさんある。
負傷兵士の妻は忙しい。

大地と共に我ら生き

負傷兵士の妻

石原敏子

今年の夏はとりわけ暑い日が続きました。田植えが終わり苗が根付いて旺盛な成長が始まった六月中旬、農業を継いだ長男が「田んぼの高い所が除草剤の効果がなく草が生えている」と言いました。中に入って歩いてみると確かに畝間に稗やホタルイがはびこっています。人手に頼らなくても一人で出来そうな気がしました。

早朝、日の出前から強い日差しが照りつける十時頃まで草取りを始めました。働いているといままで記憶の底に沈んでいたさまざまなでき事が浮かんできます。

五年前、夫と共にこの地で営農してきたことを綴り「ふるさと



秋田文学賞」をいただきました。入植して五十年が過ぎあれからの年月を続書きを書かなければ完結しません。まだ自分にその体力と気力があるのだろうかと気持ちが揺らぎます。

草を抜いて田んぼの土の中に埋め込んでいく作業は、振り返ると畝間がすっきりと表れていて成果がわかりやりがいがあります。初夏の早朝の空気は清清しく、思索にふけるのに向いています。もう一度応募してみようと奮い立たせてくれました。

五十年間の思いが溢れてきて、その気持ちを抑えて書いたらそっけないものになりました。そののがゆい思いの文章を評価して下さいました選考委員の先生方に感謝いたします。まだ頑張って生きていきなさいという励ましのようには思いました。

体が不自由で負傷した兵士のようになってしまうただ夫をただ嘆くのではなく、周囲の助けを借りてより良い方法を考えながら支えていきます。農作業の中に、やりがいと楽しみがあり、気持ちを整理するためにペンを持つひと時もあります。

負傷兵士の妻は、大地に支えられ逞しいのです。

第8回ふるさと秋田文学賞 エッセイ・紀行文の部

ふるさと秋田文学賞佳作

廃屋の月く矢口高雄さんを偲んでく

工藤 幸・著

廃屋の月々矢口高雄さんを偲んで

矢口高雄さんの訃報に接したのは、令和二年の冬の入り初めだった。折しも横手市増田まんが美術館で「矢口高雄画業五十周年記念展」が始まったばかりの頃で、雪が降り積もる前には会場に行こうか、と考えていた矢先のことであった。享年八十一歳。がんとの闘病の末に亡くなられたそうだが、つい先頃までテレビ等でお姿を拝見していたような気がして、突然の訃報には本当に驚いた。これまでのご活躍に敬意を表して、改めてご冥福をお祈りしたいと思う。

「秋田を代表する漫画家」「それまでレジャー扱いだった釣りをスポーツにまで昇華させた方」「漫画を重要なカルチャーとして保存することを提言した美術館の館長」と、この方を評する言葉には枚挙にいとまがないが、自分にとっての「矢口高雄」さんとは、「その辺の道ばたの草を恐ろしく精緻に描く人」である。

二十年ほど前のこと、画業も半ばに入って地元に係わる仕事が増えてきた時期だったのか、観光パンフレットや県民向けの冊子などで、矢口さんの絵をよく目にするころがあった。美しいカラーイラストの背景には、秋田の自然が描かれている。その描かれた草むらが、あまりにも「その辺の道ばた」過ぎるので驚いたのだ。

地面の上を這うように描かれたオオバコの伸び具合や、細長い草の中にフキの丸い葉がところどころ混じった様子などは、あるある、そんな草むらすぐその辺で見られる、と言いたくなく

るほどだ。夏場に大きく背丈を伸ばし、葉っぱが広がってくと大変厄介な道ばたの邪魔者・サンドリを、可愛らしいキャラクターの背景に描く人は、世に漫画家数多しといえど、この方だけだと思う。

以来、矢口さんの絵を目にする度に、念入りに眺める癖がついてしまった。またそれがきっかけで、矢口さんの地元に「まんが美術館」があることを知り、矢口さんご本人や自分の好きな漫画家さんの企画展示がある度に、しばしば訪れるようになった。

正直に言ってしまうと、それまで私は、矢口さんの漫画を読んだことがなかった。巻を多く重ねる漫画を後から読み始めるとき、どこから手をつけてよいものか途方に暮れてしまうことがある。本屋さんの棚にずらりと並んだ「ゴルゴ13」や「こちら葛飾区亀有公園前派出所」を、とりあえず最初から読んでみようとはしたものの、連載当初の頃の劇画調のタッチに面食らい、そつと書棚に本を戻してしまう。「釣キチ三平」も、そんな感じで読む機会を逸していった。

肝心の漫画作品を見ていないファンなどファンとは言えないかもしれないが、「釣キチ三平」のカラーイラストを集めた原画展を訪れた時には、その美しさに改めて感動した。初めて目にした生原稿は、印刷物では到底伝わらないような鮮やかさで、三平くんの赤いシャツの

色、元気いっぱいの表情やポーズ、跳ね上がる川の水飛沫や四季折々の里山の風景など、みずみずしい絵の数々は見ていて飽きることがなかった。

今回の企画展はこれまでの画業を振り返るものだったので、矢口さんが執筆した漫画が時系列順にずらりと紹介されており、「釣りキチ三平」以外にも、農村での暮らしやマタギをテーマにしたもの、日本海中部地震を描いたもの、地元の銀行員だったときのエッセイもの、様々な作品があることを知った。その中に「蛍雪時代」というご自身の幼少期を描いた漫画があり、大きな雪庇をのせた木造家屋の絵に添えられて、こんなセリフがあった。

「つまり雪下ろしです。汗と体力を消耗するだけで、何の利益も産み出さない重労働です」

強い印象の言葉だった。これほどまでに、雪の難儀さを伝える言葉があるだろうか。農作業であれば、収穫という喜びがある。しかし、雪かきはただ体力を奪われていくだけで、何をすることもない。ようやく作業を終え、最初にとりかかった場所に再び雪が降り積もっている様を見たときの絶望は、雪と共に暮らす者であれば誰もが感じたことがあるだろう。

令和二年から三年にかけての初冬は、災害レベルで降雪が多く、県南地区においては、除雪作業に自衛隊が入る事態にまで至った。雪に係わるニュースが伝えられる度に、この言葉の重みを感じる。美しい、おだやかな景色ばかりではない、鉛色の空の上から雪がとめどなく降って

くることもある、頭を抱えたくなるような現実をだ。

今回の企画展で、衝撃を受けた一枚の絵がある。「廃屋の月」と題がつけられた、イラストというより絵画と呼ぶのがふさわしい、コーナーの最後に展示されていた大判の絵だ。

可愛らしいキャラクターの姿はそこにはない。柳の下に立つ幽霊のように、ぼやけて霞んだ茅葺き屋根が墨色に描かれている。茅は荒れ果て、いろりの煙が通らなくなった屋根の最上部には、野の花がひっそりと咲いている。その花を暗闇の中で照らす、大きく赤みがかった月が印象的な絵だった。

主要道路から離れ、山あいの峠道に車を走らせているとき、田の畔が次第に崩れて丸みを帯び、スキヤキや灌木が生えて徐々に山に戻りつつある景色を見ることがある。誰かが大変な難儀の末に山を切り開き、平らにならし、水を引いたであろうに、そんな様子を目にするたびに、例えようがない気持ちになる。先祖から受け継いだ田んぼだから無くすわけにはいかない、赤字になっても苗を植え肥料をまき、虫がわいたら周囲に迷惑をかけてしまうから、と水を入れなくなった田の草を丁寧に刈る。そんな風に思いを込めた田でも、やむなく人に作業を頼むこともあれば、やがてそれすらもできなくなつて、こういった放棄地が増えていくのだろう。それを責めることは誰にもできない。誰かの苦勞が無に帰していくのが、ただ寂しいだけだ。

「廃屋の月」には、失われつつあるものに対する、深い惜別の念が込められているような気がする。叫び出したくなるような寂しさがあるのに、それを包む空気が優しく、温かい。日が沈んだ後、満月がぼっかりと裏山の稜線越しに姿を見せるとき、天頂高くあるときよりも大きく、赤みがかったオレンジ色に見えることがある。よく目にする、なじみ深いあの月の色だ。

矢口さんは、雪国生まれだから四季のなかで一番好きなのは春、と一問一答のインタビューに答えられていた。深く厳しい冬があるからこそ、木々が芽吹き、枝の先に若草色の葉が次第に増えていく季節がこの上なく喜ばしい。家の軒下にクロッカスやスイセンが咲き、やがて芝桜の花が広がるようになった頃、苗を植えるばかりになった田に水が満たされ、お天気のいい日に真つ青な空の色を写して、一面湖のように見える季節が私も好きだ。

矢口さんが手がけ、日本観光ポスターコンクールで特別賞を受賞したポスターとその原画の展示もされていたのだが、春夏秋冬・四枚のイラストのうち「春」で矢口さんが描いていたのは、こぼれるように咲くタニウツギの花だった。梅でもなく桜でもなく、タニウツギを選んだのが矢口さんらしい。私はこの花の名を、植物好きの家族と登山に行くようになってから初めて知った。何時間も山を登らないと見ることができない高山植物ではないが、街中に咲く花で

はない。少し山に入つたところの道路端や、日当たりのいい斜面などに、よく居心地良さそうに咲いている。里山を代表する花なので、名は知らなくても、鮮やかなピンク色に咲く花卉や低木のツツジに似た姿を見れば、ああ、あの花のことか、と思ひ当たる人もいることだろう。

会場にあつたパネルに「一輪の野の花を誤魔化さず」という矢口さんの言葉を見つけた時、全てに合点があつたような気がした。自分にとって矢口さんが「その辺の道ばたの草を恐ろしく精緻に描く人」であることに変わりはない。四季折々の景色に触れながら、ふるさとのいいところも悪いところも受け入れた上で、一輪の野の花の美しさを愛でる。矢口高雄さんは、それを教えてくれた方だ。

余談ではあるが、「道ばたの邪魔者」と呼んでいたサシドリが、おいしく食べられることを後に知つた。もちろん食用に使うものは山の奥から選んで採ってくるそうなのだが、手間のかかる季節の食材を思う存分食べられる環境を、改めて有り難く思う。今では大好物となつたサシドリを、また矢口さんの絵の中で見つけたとき、あの時とは違つた気持ちで見ることができるとも思はない。その時はおそらく、「邪魔者」ではなく「うまそうだ」になることだろう。

「釣キチ三平」が実写映画化された際は、県内の様々なメディアがそのことを報じていたが、「三平くんと演じる俳優さんのイメージがぴったり一緒なんだよ」と、矢口さんが少年の

ような表情で嬉しそうにお話していた姿を思い出す。上映館を探して行ったこと、昨年ようやく、撮影地の一つだった「法体の滝」を訪れ、映画のシーンと実際の風景を比べて見たのも、楽しい思い出となった。

矢口さんご本人にお会いすることはもうできないけれど、三平くんにならいつでも会うことができる。「文化の発信元である漫画原稿の保存」を理念とする美術館の中で、大切に守られていることだろう。

これからも、日々の生活の中で自然の機微を感じながら、時には悩まされ、時には喜びを得て、この場所で暮らしていきたいと思う。

矢口高雄さん、思い出深い作品の数々を遺して頂き、ありがとうございました。

廃屋の月～矢口高雄さんを偲んで～

エッセイ・紀行文の部 ふるさと秋田文学賞佳作 受賞者のことば

いつも身近に

工藤 幸

何事にも取り掛かるのが遅い性分の自分ですが、今回投稿した「廃屋の月」は、企画展を訪れてからほどなく書き上げた作品でした。好きなものについて語っている時は、遅々とした筆も思いのほか早く進むものです。

そんな状態だったので、枚数の規定が変わったことを知った際は頭を抱えました。制限枚数ギリギリまで詰め込んだ原稿の前に、どのエピソードも削れない、残したい、と悩みつつ文字数を絞り込む作業に取り組みました。ところがいざ仕上げてみると、それほど支障なくまとまった気がします。本人が捨てきれないこだわりほど、実は不要なものだったのか



もしれません。

矢口さんの訃報を目にした時、最初に沸き上がったのは後悔の念でした。まんが美術館で開催されているギャラリートークに、矢口さんがしばしばおいでになっていることは知っていたのですが、あこがれの人に直接会うことの気恥ずかしさと、いつでも行けるから、との安易な考えで、ご本人に直接気持ちを伝える機会を失ってしまいました。

秋田を舞台に、あるいは題材とするこの賞があったことで、伝えられなかった思いを、こうしてかたちにすることができました。拙いところの多い作品ではありますが、このような機会を頂いたことは、望外の喜びです。賞に携わる皆さま方に、心より御礼申し上げます。

選
評



©三宅史郎

「説明」 せずにどう書くか

内館 牧子

今年も選考委員三名の意見が割れ、それぞれの推薦理由、また選外理由を箇に衣着せずに選べる選考会になった。

小説の部で大賞をとった「山椒と虹」（神奈川県・渡部麻実）は、三名のうち二名が最高点をつけた。文章も構成もよく、格調がある。また、登場人物の心理描写もいい。

私個人としては、やや「ありきたり」な部分が気になった。夫が手を上げる理由や「わたしがまんすればいい」という思いなど、新聞の人生相談にもよく出てくる。主人公にとって、その通りである以上、それでいい。ただ、それに対して説得力が欲しかった。また、最後に「虹」で締めるのも、いささかありきたりでは？

佳作になった「停戦旅行」（岩手県・畠山政文）は二名が評価し、もう一名は厳しかった。

この作品は六十歳を過ぎた夫の、妻への視点がリアルに書けている。竜の首に一枚あるという「逆鱗」の例えも、妻の怒りの種類とサラリとからめて面白い。私は最初に読んだ時、「失敗作」の中学生の話や、「厄介叔父」の話までを、この枚数の中に入れるのはどうかと思った。だが、うまく重なり、違和感がなかった。

最終選考に残った「ここから一步を、確かな一步を」（千葉県・谷門展法）の、一番のマイナス点は職人が初対面の旅行者に語りすぎることだ。登場人物の説明ですべてをわからせるのは、安易ではないか。

「夜明け」（愛知県・幸祉豆柀）は面白いが、双生児の物語は非常によくある題材だ。そのため、過去のものとどこか違う視点、展開が欲しかった。

「アピールポイント」（秋田市・佐藤多之助）は、書く力のある人だと感じた。ただ、ハローワークを取材したのだろうか。私は小説「終わった人」を書く際、ハローワークを何か所も取材したが、ここまで訓練してくれるところは一軒もなかった。実際にはあるのか。

エッセイ・紀行文の部は接戦だった。

「大地と共に我ら生き」、「廃屋の月く矢口高雄さんを偲んで」、「闇に浮かぶ光」が同

点だった。そして、「ダムに沈む里」がわずか一点差で追う展開。

むろん、点数はひとつの目安である。各委員がその作品について語り、推すことでさらに討議し、順位がひっくり返ることもある。

さんざん意見を述べあった結果、大賞は「大地と共に我ら生き」（大瀧村・石原敏子）に決まった。私はこの作品を高く評価している。全篇を通じて、どこか哀しみが漂う。それを直接書いてはいないし、声高に叫んでもいない。なのに漂う。また、若い時代との比較もサラリと深く、とても優れた短編になっていると思う。

佳作の「廃屋の月々矢口高雄さんを偲んで」（小坂町・工藤幸）は、矢口への思いがよく伝わってくる。

ただ、選考委員たちには、「これはエッセイか。追悼文だろう」という一致した思いがあった。「矢口のすばらしさを『エッセイ』にするには、訓練が足りない」という厳しい意見もあった。

私個人としては、冒頭の7行と最後の3行は不要と考える。「改めてご冥福をお祈り」したり、「ありがとうございます」と書いたり、エッセイには不要だろう。冒頭と最終の思い

を、エッセイとしてどう書くか。まさに「訓練」がいる。「廃屋の月」というタイトルは、私はとても好きだ。だが「矢口高雄さんを偲んで」のサブタイトルは不要だったと思う。偲ぶ気持をエッセイとしてどう書くかである。

選に入らなかった「闇に浮かぶ光」（秋田市・浅倉紀男）は、「蛍」と「祭り」の二つの話
がうまくリンクしていない。特に「祭り」の方は、彼を追って帰路までを説明しているように
思えた。どちらもいい話だけに残念だった。

「ダムに沈む里」（秋田市・石山敦子）に、私は高得点をつけた。「文化も歴史も水中に眠
る」などいい文があり、格調を感じる。淡々とした中に感情もこめられ、いい作品になってい
る。足りないとする、読者を引っ張り込む力ではないか。

〈脚本家 秋田市出身〉



どこに視点を置くか、冗漫を削る

塩野 米松

応募作品の質が上がった。特に小説部門の最終選考に残った5作は粒ぞろいで、選考に迷った。応募者はかなりリピーターが多いという。今回は両部門で総数が127。そのうち、新しく応募された方は約4割。かなりの方が、何度も作品を構想し、調べ、仕上げて、送ってくださっているのだ。質が上がるのも「なるほど」と頷ける。

小説部門。秋田文学賞受賞作は「山椒と虹」（渡部麻実）。何度か応募してくれて受賞経験者。コロナ禍の家族の話だ。語り手は秋田出身の妻。夫とは東北大震災の時に、大学で出会っている。互いに東京で就職、4年後二人は結婚する。互いの実家とのつきあいも薄い。不妊かと思いついた頃、妊娠する。コロナ禍で世間も病院も全員マスク、面接禁止という異常のなかで出産だった。やがて子供が2歳。夫はリモートワークで家にいるようになった。仕事部屋に

したのが娘用のピンクの壁紙に部屋。ひきこもってしまった夫の不機嫌が続き、家のなかには暗い。夕飯に出したビールが冷えていないと、夫は妻を殴る。この後何度も殴るようになる。著者がどうして何度も殴る設定にしたのか。一度殴ってしまったのと、何度も殴るのでは話は違ってくる。このままどう小説を終わらせるのか。県外への行き来もできず、祖父母と孫は携帯電話の画面で会うだけ。秋田の実家から荷物が届く。入っていた山椒の小枝と窓の外に見えた虹が、この小説のタイトル。現状の日本の状況を背景に、孤立した夫婦の姿をうまく描いている。最後の山椒と最後の虹はいただけでない。せっかく積み上げたのに終わりを型にはめてしまった。この方の過去の作品も読ませてもらったので、格段の進歩を感じた。

佳作は「停戦旅行」（畠山政文）。文が立ち、読ませるのだ。でもあと一息が足りない。常連ゆえにそこがまどろっこしい。娘が二人いる夫婦の話だ。一緒になって30年以上たつ二人に「離婚」の言葉がちらつく。二人はGOTOトラベルを利用して旅行に。観光地の案内や、のろけ、無駄な文が多い。前置きの26行は不要では。それと妻が高1で中退というような設定も理解ができない。そのことが妻の立ち位置や物言い低くしているとしたら、今の時代の設定としては、どうか。文章が書けるというのは、過去の作品で充分存じている。もう一つ踏ん張れと、尻をたたいた意味の佳作である。

「夜明け」（幸祉豆枿）は佳作を競った作品。地方の役場の老警備員の話。大晦日の夜に一人で婚姻届に来た女性がいた。夫になる人を待って、一緒に書類を出したいと。だが、その人が来ない。役場のようすや公務員の仕事など、じつによく書かれている。毎回、指摘されているのだが、双子や解決の手紙などを安易に使うと「ご都合」の終わりになってしまう。もったいない。

「アピールポイント」「ここから一步を、確かな一步を」。形としては整っている。何をテーマに、どう構成するか。冗漫な文を整理する。ある文章を入れるときその意味と効果を検討すること。いいものをお持ちなのだから、再挑戦を。

エッセイ・紀行文部門。

今回から10枚に制限枚数を減らしたのは、推敲を重ね、冗漫な部分や説明文、引用を削り、シンプルにすることでいい作品に仕上がるのではという期待からだ。その結果が出なかったのは残念。最終選考に残ったのは4作だが、秋田文学賞は「なし」にしようかと話も出た。それでも、激励も含め「大地と共に我ら生き」（石原敏子）を文学賞に決めた。八郎瀉干拓地へ入植したときに庭に植えたケヤキが50年経ち、大木になった。家族の歴史でもあるその木を伐ることに。その木はやがてみごとなテーブルに。自分が体験した50年の思いを描いたもの。

経緯や出来事がいいエッセイになることもある。そのためには自分と情景をよく観察し、どうまとめるか工夫が要る。映像が浮かび、読者がそれに共鳴するような仕上げが望ましい。説明は要らない。私なら、木を伐った後の風景を入れる。なくなった物が描くものがあるからだ。

佳作の「廃屋の月々矢口高雄さんを偲んで」（工藤幸）。作品としてはまだまだ整理が必要。選者達が悩んだのは追悼文はエッセイだろうか、ということだった。ただ、この作品は思いを載せた文章だというのはわかる。また一歩進んだ作品を書いて欲しい。

「闇に浮かぶ蛍」「ダムに沈む里」。きれいな文にしようというのもの、思いを込めて書いたのもわかるが、話が飛びすぎたり、前後がうまくかみ合わず、独り合点になってしまっている。もう一段の訓練を期待します。

この部門66点の応募があったが、今回は光るものがなかった。残念です。観察、文章のスケッチ、最後まで仕上げることに。その繰り返しがいい作品を生みます。がんばって応募してください。

〈作家 仙北市（旧角館町）出身〉



ふるさと秋田文学賞選評

西木 正明

今回の文学賞選考の現場、とりわけ小説の部では、例年にもまして良い作品があり、これに順番をつけるのはつらかった。

とはいえ、それが筆者ら選考委員の任務なので、いずれの候補作にも心を鬼にして厳しく点数をつけた。

とりわけ小説の部で受賞作となった「山椒と虹」は、これがアマチュア作家の作品とは思えぬ出来栄えに感じ入った。

リズムカルな読みやすい文章に乗せられて読了したときは、なにこれという感嘆に変わっていった。

プロットすなわち筋書きは、「一瞬の愛の長い後遺症」という戯れ言で説明できる。しかし

随所に見られる才気あふれる表現力が、読む者を最後まで引つ張っていった。

選考の段階で筆者が最後まで悩んだのが、佳作受賞の候補となった「夜明け」「停戦旅行」「アピールポイント」そして、「ここから一步を、確かな一步を」。

これらの作品は、一位入選作とは対照的に短編王道ともいえる五十枚前後の紙幅。プロットもありふれた人生を淡々と描いた私小説。「自虐的私小説」である。

しかも冒頭の数ページは、ままで改行なしで一人称の地の文。参ったと思いつつ、気がつく
と読了していた。

先に入選作と対照的に書いたのは、このあたりを指してのことだが、実はすばらしい共通点もある。それは、普通なら途中で読むことをやめてしまうような、一人称で改行なしの地の文を、気がつくとき読み終えていたと読者に思わせる、リズムカルにして表現力豊かな一節である。

登場人物は、いずれも個性的な夫婦と父母。それを描く「わたし」は、徹底的に没個性に徹している。

これも並のアマチュアができることではない。

こうした力業に溢れた作品で、しかもプロットはまるで逆。しかし、そこかしこに出現する凄味のある表現力は共通する。

出来うることなら、この二作品とも入選にしたかったが、この手の文学賞としては、やはりきちんと入選と佳作を提示した方がいいと思いなおし、今一度読みなおした。

そしてわずかな差を見つけた。

それは題名。よく題名も作品のうちと言われるが、この度はまさにそれだった。

〈作家 仙北市（旧西木村）出身〉

一次選考委員 寄稿

フィクション

柴山芳隆

芥川龍之介の小説『奉教人の死』はキリシタン物である。奉教人とはキリスト教徒の謂である。この作品は「一」と「二」から成っているが、まず前者のあらすじを紹介する。

長崎の「さんた・るちあ」寺院に、眉目秀麗で信仰心の厚い「ろおれんぞ」という少年がいた。周囲の誰もが少年を愛していたが、中でも「しめおん」は弟のように可愛がっていた。彼は、もともと槍一筋の家柄の者で、身の丈抜群の剛力者であった。「ろおれんぞ」が元服の頃、怪しげな噂が立った。町方の傘張りの娘が「ろおれんぞ」と親しい関係だという。艶書を交わし合ったといった話がまことしやかに流された。その後、傘張りの娘が妊娠し、腹の子の父は「ろおれんぞ」だと親に告げた。「ろおれんぞ」は即座に破門され、町はずれの小屋に暮

らす哀れな浮浪者となった。それから一年余り経った夜、長崎の町半分を焼き尽くす大火が発生した。傘張りの家は炎に包まれるが、娘の産んだ幼児の姿がない。そこに「ろおれんぞ」が駆けつけ、火炎の中に飛び込んで救出した幼児を娘の前にかろうじて投げ出してよこした。火炎の中で動けない「ろおれんぞ」を「しめおん」が救い出し、安全な場所に横たわらせた。一部始終を目撃した傘張りの娘は、幼児は「ろおれんぞ」の子どもではなく、異教徒と密通してできた不義の子だと白状した。それが「ろおれんぞ」の耳にも届いて二、三度うなずいた。その折、服も焼けただれた「ろおれんぞ」の胸に二つの乳房が見えた。「ろおれんぞ」は女性であったのだ。「ろおれんぞ」は天国を仰ぎ見て、微笑みを浮かべながら息絶えた。

『奉教人の死』の「二」の部分には、あらすじを紹介した「一」の物語の出典が示されている。長崎耶蘇会の出版した『れげんだ・おうれあ』という上・下二巻本がそれである。該書は上巻八章、下巻一〇章から成る六〇ページほどの書物である。「一」で述べられている内容は下巻の第二章にあると明示されている。

『奉教人の死』は大正七年（一九一八）に発表された作品だが、発表と同時に芥川のもとにはキリスト教関係者や好事家から手紙類が殺到した。出典とされている『れげんだ・おうれ

あ』を手に入れたが見つかからない、どうしたら入手できるかといった内容がほとんどで、中には金銭を同封のうえ譲渡を依頼してきたケースもあったと伝えられている。貴重な新資料と映ったのであろう。しかし、それらに対する芥川の答えは、出典云々も含めて私の創作です、と簡単であった。『れげんだ・おうれあ』なる書籍はもともとどこにも存在しないのである。小説家は、必要があれば、「出典」をも創作してしまうということを小説の書き手はもちろん、読み手もしっかり頭に入れておきたい。芥川のこの作品は、傑作として高く評価される一方で、フィクション（虚構・仮構）とはどういうものかを学ぶ恰好の教科書にもなっているのである。

小説の最大の目的は人間や人間社会の真実の表現であるが、そもそも、現実と真実は同義語ではない。現実のなかで真理を具現しているものだけが真実である。

よく言われるように、すべて人間の科学は我々が感得する事実の下に横たわる真理を発見しようとする努力である。すべての人間の哲学はその発見された真理の意義を了悟し、価値づける努力である。そして最後に、すべての人間の芸術は、その了悟され、鑑定された真理を明瞭かつ有効に表現する努力である。

文芸にかぎらず、真実の表現を第一義とする芸術作品は猥雑なものは容赦なく排除し、真実の表現に役立つものだけを積極的に活用していく。小説の世界では、そうした「表現」の強力なツールの一つがフィクションなのである。作者としてはそれを使いこなし、読者としてはその妙を味わっていききたいものである。

〈作家 秋田市在住〉

秋田県の読書活動推進施策

～県民運動の視点で読書活動を推進～

秋田県では、全国に先駆けて読書条例〔秋田県民の読書活動の推進に関する条例（平成22年4月1日施行）〕を制定し、また毎年11月1日を「県民読書の日」と定めています。

「第3次秋田県読書活動推進基本計画」（令和3年度から7年度まで）に基づき、「生涯にわたって読書に親しみ、心豊かに」という基本目標のもと、県民がライフステージに応じて読書に親しむ活動を推進しています。



©2015 秋田県んだッチH290213

《読書活動推進体制》

●秋田県読書活動推進基本計画の進行管理

秋田県読書活動推進本部《知事を本部長とし、各部局長で構成》

●施策の一体的推進

秋田県読書活動推進連絡会
《庁内関係12課所で構成》

総合政策課 次世代・女性活躍支援課
長寿社会課 障害福祉課
教育庁総務課 幼保推進課 義務教育課
高校教育課 特別支援教育課
生涯学習課 県立図書館
生涯学習センター

●市町村との協働による推進

秋田県読書活動推進連絡協議会
《県と25市町村で構成》

市町村企画担当課
市町村教育委員会読書活動推進担当課

県総合政策課
教育庁総務課 生涯学習課

《令和3年度 県の読書活動推進の取組》

○読んだッチ・リレー文庫

子どもたちの読書環境を充実させるため、家庭で読み終わった絵本や児童書を県民の皆様から寄贈していただき、希望する保育所等に贈って子どもたちに読書の楽しさをリレーする取組です。

平成23年度から令和2年度までの10年間で1,085名の方々から寄贈があり、878か所の施設に届けられ、子どもたちに楽しんでもらっています。

保育所、幼稚園、放課後児童クラブ、公民館、体育館、病院、店舗等、子どもたちが集まる県内の施設ならどこでも設置できます。随時受付していますので、ぜひご利用ください。



読んだッチ・リレー文庫（例）

○「あきたブックネット」による情報発信

県公式ウェブサイト「美の国あきたネット」内の特設ページ「あきたブックネット」で著名人がおすすめする本の紹介やこれまでの県の取組など、読書が身近になる情報を発信しています。

また、Twitterアカウント「あきたブックネット」では、読書に関して特徴ある活動をしている人物や巷で話題の本など、県内外の読書や秋田に関する新しい情報を随時提供していますので、ご覧ください。



Twitter「あきたブックネット」

○読書活動ステップアップ事業

若者を中心とした県民の読書意欲を喚起するため、特徴のある取組をしている図書館や書店、ブックカフェの経営者等取材し、Twitterやウェブサイトで発信しています。

また、本文学賞の受賞作品を映像化した読書啓発動画等を制作し、動画投稿サイトYouTubeで配信しています。

～読書に関する情報を発信しています～

○「あきたブックネット」（「美の国あきたネット」内）

<https://www.pref.akita.lg.jp/pages/archive/31730>



作品募集要項・実施状況



第8回ふるさと秋田文学賞 作品募集要項

●募集作品

- テーマ 秋田県を舞台とした、あるいは秋田県内の自然・文化・風土・人物・物産などを題材とした小説、エッセイ、紀行文
- 部門 「小説の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙50枚以内
「エッセイ・紀行文の部」 ……A4判の400字詰め原稿用紙10枚以内

●応募資格

年齢・職業・国籍を問わず、どなたでも応募できます。

●作品募集期間

令和3年4月1日(休)から令和3年7月31日(出)まで
※郵送(当日消印有効)または持参(平日午前9時～午後5時)してください。

●賞

「小説の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金50万円)	
	ふるさと秋田文学賞佳作…1編(正賞/賞状 副賞/賞金5万円)	
「エッセイ・紀行文の部」	ふるさと秋田文学賞 ……1編(正賞/賞状 副賞/賞金20万円)	
	ふるさと秋田文学賞佳作…1編(正賞/賞状 副賞/賞金2万円)	

※入賞者には、後日、受賞作品集を贈呈します。

ご注意
送付部数は
4部(コピー可)

●選考委員

1次選考委員 柴山 芳隆 氏 (作家 秋田市在住)

最終選考委員 内館 牧子 氏 (脚本家 秋田市出身)
塩野 米松 氏 (作家 仙北市:旧角館町出身)
西木 正明 氏 (作家 仙北市:旧西木村出身) (五十音順)

●応募規定

- 原稿 ・原稿は縦書きとし、電子データでの応募は不可とします。(ワープロ原稿は横長A4判の白紙に30字×40行の縦書きで印字し、400字詰め原稿用紙換算枚数を明記)
・日本語で書かれた自作未発表のものとし、
- 表紙 ・応募作品には次の事項を明記した表紙をつけてください。
①応募部門、②題名(ふりがな)、③原稿用紙換算枚数、④氏名(ふりがな)、ペンネーム(使用する場合のみ)、⑤郵便番号、⑥住所、⑦電話番号、⑧年齢、⑨性別、⑩職業(学生の場合は学校名)、⑪引用または参考とした資料・文献、⑫募集を知ったきっかけ(過去に応募、リーフレット、公募ガイド、新聞、ウェブサイト名等)
- あらすじ ・200字程度にまとめた「あらすじ」を表紙の次のページに添付してください。
- 応募部数 ・作品は4部お送りください。(コピー原稿可。必ず通しページ番号をつけ、表紙、あらすじを書いた紙を添付の上、右肩をクリップ等で綴じること。)
- その他 ・表紙、ワープロ原稿の様式は、ウェブサイト「美の国あきたネット」でダウンロードすることができます。
・〈表紙〉に記入された個人情報、本文学賞に関するもの以外には使用しません。
・応募作品は一切返却しませんので、あらかじめご了承ください。
・各部門一人1編に限り、同一部門への二重投稿は失格となります。
・入賞作品の著作権は主催者に帰属します。(ただし、主催者は著作者本人の意向を尊重し、作品を広められるよう配慮するものとします。)

●選考結果の発表

- ・令和3年10月下旬、入賞者に直接通知するとともに、ウェブサイトに掲載します。
- ・表紙は、正賞及び副賞の目録の発送により行います。

●応募・問合せ先

秋田県企画振興部 総合政策課 県民読書推進班
〒010-8570 秋田県秋田市山王四丁目1番1号
電話 018-860-1216 <平日:午前9時～午後5時>

第8回ふるさと秋田文学賞の実施状況

1 応募状況等

- ・応募総数127

[内訳] 小説の部61、エッセイ・紀行文の部66

2 最終選考候補作品（敬称略）※応募順

○小説の部（5作品）

『ここから一步を、確かな一步を』ペンネーム 谷門 展法（千葉県柏市）

『夜明け』ペンネーム 幸祉 豆杵（愛知県名古屋市）

『停戦旅行』畠山 政文（岩手県花巻市）

『アピールポイント』ペンネーム 佐藤 多之助（秋田県秋田市）

『山椒と虹』渡部 麻実（神奈川県横浜市）

○エッセイ・紀行文の部（4作品）

『大地と共に我ら生き』石原 敏子（秋田県大潟村）

『廃屋の月～矢口高雄さんを偲んで～』ペンネーム 工藤 幸（秋田県小坂町）

『闇に浮かぶ光』浅倉 紀男（秋田県秋田市）

『ダムに沈む里』石山 敦子（秋田県秋田市）

3 入賞作品（敬称略）

○小説の部

<ふるさと秋田文学賞>

『山椒と虹』渡部 麻実（神奈川県横浜市）

<ふるさと秋田文学賞 佳作>

『停戦旅行』畠山 政文（岩手県花巻市）

○エッセイ・紀行文の部

<ふるさと秋田文学賞>

『大地と共に我ら生き』石原 敏子（秋田県大潟村）

<ふるさと秋田文学賞 佳作>

『廃屋の月～矢口高雄さんを偲んで～』ペンネーム 工藤 幸（秋田県小坂町）

第8回ふるさと秋田文学賞応募者内訳一覧(R3)

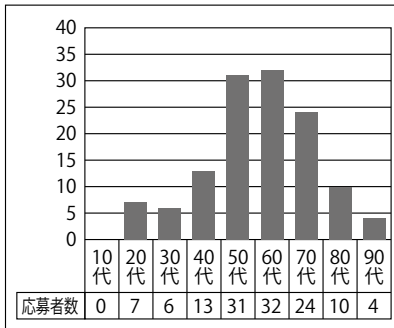
部門別応募数(編)

小説	61
エッセイ・紀行文	66
計	127

男女別応募者数(人)

男	78
女	49
計	127

年代別応募者数(人)



都道府県別応募者数(人)

県内	49
県外	78
北海道	1
青森県	1
岩手県	4
宮城県	2
山形県	0
福島県	1
茨城県	3
栃木県	1
群馬県	1
埼玉県	4
千葉県	6
東京都	18
神奈川県	8
新潟県	0
富山県	1
石川県	0
福井県	1
山梨県	1
長野県	1
岐阜県	2
静岡県	2
愛知県	2
三重県	0
滋賀県	1
京都府	3
大阪府	3
兵庫県	3
奈良県	1
和歌山県	0
鳥取県	1
島根県	0
岡山県	0
広島県	1
山口県	0
徳島県	0
香川県	2
愛媛県	1
高知県	1
福岡県	0
佐賀県	0
長崎県	0
熊本県	0
大分県	1
宮崎県	0
鹿児島県	0
沖縄県	0
計	127

第8回ふるさと秋田文学賞受賞作品集

発行日 令和四年二月一日

発行 秋田県

編集 秋田県企画振興部総合政策課